室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

モンゴル語の補語の意味論-格と述語との意味役割の一致について-

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 北海道言語研究会
	公開日: 2015-10-15
	キーワード (Ja): 格, 意味役割, 補語, 項, 付加語
	キーワード (En):
	作成者: 橋本, 邦彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3814

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

モンゴル語の補語の意味論 - 格と述語との意味役割の一致について -

その他（別言語等）のタイトル	The Semantics of Complements in Mongolian-Semantic Role Agreement between Cases and Predicates-
著者	橋本　邦彦
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	13
ページ	49-102
発行年	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3814

北海道言語文化研究
No. 13, 49-102, 2015.
北海道言語研究会

モンゴル語の補語の意味論
- 格と述語との意味役割の一致について - *

橋本　邦彦

The Semantics of Complements in Mongolian-Semantic Role Agreement between Cases and Predicates-

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract：The purpose of this article is to demonstrate that a complement can have the function as an argument when there is a bidirectional agreement in semantic role between the case and the verb/ predicate adjective. Five cases in Mongolian are treated for consideration: accusative, dative-locative, ablative, instrumental and comitative. The semantic role agreement will indicate whether a complement is an argument, an adjunctive argument or an adjunct.

キーワード：格、意味役割、補語、項、付加語

1.　問題の所在：意味役割と補語

本論考の目的は、名詞補語のとる格形と動詞や叙述的形容詞(predicative adjectives)などの述語との間に意味役割の一致(Semantic Role Agreement)が成立する事実を検証することにある。格が固有に持っている意味役割と動詞が指定する意味役割との間に一致のある時には、当の格形を担う名詞補語は義務性の強い項(argument)と解釈される一方、一致のない時には任意的な付加語(adjunct)と捉えられるであろう。

意味役割が言語研究で重要な道具立てとなるきっかけを作ったのは、Gruber(1965, 1976)である。語彙の間に成立する関係を主題関係(thematic relations)として捉えるこの理論は後にJackendoff(1972)で精緻化され、Chomsky(1981)に引き継がれ、動詞の項とその意味役割に関するθ理論(θ-theory)に結実するのである。θ理論によれば、動詞が要求する項の数と、それぞれが果たしているθ役割（意味役割）は動詞ごとに決まっている。

(1) a. <u>John</u>　hit　<u>Bill</u>.
Subject　Verb　Object : 文法役割(grammatical roles)
AGENT　ACTION　PATIENT : θ役割(θ roles)

b. The news　surprised　Bill.
Subject　Verb　Object　: 文法役割(grammatical roles)
CAUSE　EMOTION　EXPERIENCER : θ 役割(θ roles)

(1a, b)は共に主語と目的語からなる他動詞構文であるが、θ 役割の種類は動詞のタイプに応じて異なる。(1a)は行為動詞であるので、主語が意図的な行為をおこなう AGENT(行為主)であるのに対し、(1b)は感情を表す心理動詞(psych-verbs)なので、主語は感情を引き起こす CAUSE(原因)である。同様に、(1b)の目的語は動作により何らかの影響を被る PATIENT(被動作主)である一方、(1b)の目的語は心理的変化を経験する EXPERIENCER(経験主)である。動詞 hit も surprise もその前後に 2 つの項を要求し決まった種類の θ 役割を指定するのであるから、これらを無視した文は不適格と判定される。

(2) a. *John hit.
b. *The news surprised.

(3) a. ?The hammer　hit　John.
INSTRUMENT +AGENT?　PATIENT
b. ?Bill　surprised　the news.
CAUSE+AGENT?　THEME

(2a, b)は項が一つしかないので不適格である。(3a, b)は意味役割の種類（とひょっとしたら数）が動詞の指定するものとはずれているために、不自然さを醸し出してしまう。

Chomsky(1981: 36)は項と θ 役割の間に θ 基準と呼ばれる次のような条件を立てる。

(4) θ 基準(θ-criterion)：
a. 項はそれぞれ、一つの（そしてたった一つの）θ 役割をもっていなければならない。
b. 述語の θ 役割はそれぞれ、一つの（そしてたった一つの）項に与えられなければならない。

この基準により、文において動詞が取る項の数とその項構造における θ 役割とは一対一の対応関係になければならないことが規定されるのである。

この生成文法の路線に乗った考え方とは別に、Fillmore(1968)は、顕在格のほとんどない英語の名詞句に抽象的な深層格（意味役割に相当）を設定して、一見異なる文構造にも共通した意味役割を担う格が付与されていることを明らかにしてみせた。

(5) a. John　opened　the door　with the key.
Subject　Object　Prepositional Object: 文法役割(grammatical roles)

AGENTIVE OBJECTIVE INSTRUMENTAL : 深層格(deep structure cases)

b. The key opened the door.

Subject Object : 文法役割(grammatical roles)

INSTRUMENTAL OBJECTIVE: 深層格(deep structure cases)

(5a)の the key の文法役割は前置詞目的語であり、意味役割は道具なので深層格にINSTRUMENTAL(道具格)が与えられる。一方、(5b)の the key は主語であり文における位置も形もそれに伴って変わっているが、意味役割と深層格は(5a)と同じままである。意味役割とそれを担う深層格の具現形は構文という枠の中で決まってくる。意味的な深層構造という極めて生成意味論的な考え方はその後捨て去られるけれども、構文における意味役割に基づいた文法関係という視点は、認知言語学や Goldberg(1995, 2006)の構文文法(Construction Grammar)に受け継がれ、興味深い言語事実を浮かび上がらせてくれている。

このように、今日の言語理論の説明上の手立てとして豊かに花開いている意味役割に問題はないのだろうか。ここでは、三点問題点を挙げると共に、本稿で採る立場、あるいは方向性についても言及したい。

第一の問題点は、意味役割の数と種類が確定していないことである。たとえば、次のような意味役割を設定することができる。

(6) ① AGENT（行為主）: 意図的な、あるいは自ら、動作を行うもの
② PATIENT（被動作主）: 動作により物理的な影響を受けるもの
③ EXPERIENCER（経験主）: 心理的な変化を経験するもの
④ RECIPIENT（受領主）: 何かを得る意志的なもの
⑤ BENEFICIARY（受益主）: 何らかの行為により利益を得るもの
⑥ THEME（主題）: 状態や位置の変化を被るもの
⑦ CAUSE（原因）: 変化の原因となるもの
⑧ SOURCE（出所）: 対象の位置・状態変化の出発点
⑨ GOAL（行先）: 対象の位置・状態変化の到着点
⑩ LOCATION（場所）: 行為の行われる、もしくは、状態の生じる場

(6)では合計 10 の意味役割が挙げられているが、これで完璧な意味記述ができるというわけではない。実際、Van Valin and LaPolla(1997: 85)には、「参与者役割(participant roles)」の名の下に、さらに、EFFECTOR（効果主）、FORCE（力）、PATH（経路）が加えられている。記述の厳密さにこだわるなら、TIME（時間）、ACCOMPANIMENT（随伴）、CHANGE（変化）などが必要になるかもしれない。

そこで、Dowty(1991)は意味役割を proto-AGENT と proto-PATIENT の二つのマクロ役割(macro roles)に絞り込むことを提案する。proto-AGENT は行為や状態の意志的な関与、知覚・感情、原因、運動、自立した存在の各々の主体を包摂する。一方、proto-PATIENT は意志的

もしくは因果的に影響を被ったり、状態変化を受けたり、知覚・感情の受け手、何かに依存した存在などを含む。この考え方に従えば、(6)とそれに関連して挙げた意味役割のうち、AGENT、EXPERIENCER、CAUSE 等は proto-AGENT に、PATIENT、THEME、RECIPIENT、BENEFICIARY などは proto-PATIENT に収めることができるだろう。すなわち、いくつもの意味役割は、二つの意味役割からの派生形として捉えられるのである。これにより、意味役割の数と種類の未確定の問題は解決するかに見える。英語のようにごく一部の代名詞や疑問詞を除いて形態格の著しく退化した言語では、動詞の前後に現れる項名詞句に焦点を置いて、統語的な制約から他動性(transitivity)を説明することができる。主語には生物から無生物、はたまた出来事や抽象物など多様な意味を持つ名詞句が立ち得るのだから、そもそも意味役割を吟味したり精緻化したりする必要がないように思われる。Dowty の proto-AGENT と proto-PATIENT を動詞の前と後の項にそれぞれ付与し、あとは個々の動詞のタイプと意味から説明を加えれば十分である。ところが、フィンランド語やモンゴル語など形態格が豊富で、語順などの統語的制約の比較的ゆるい言語では、名詞句に付与される格が固有に持っている意味役割の精緻な記述が必須の事項なのである。英語とは違って、統語論の出る幕はあまりなく、むしろ具体的な格形の語と語との局所的な関係が文構造を考察する際に重要な役割を演ずる。ここにおいて、ジレンマに出会う。意味役割の数と種類は無際限に増やしたくはない一方で、あまりにも大雑把な区別ですますこともできない。では、どうしたらよいのであろうか。

意味という具体的に捉えるのが難しく、主観的な判断の介入しやすい領域では、そこで用いる概念の数と種類を必要最小限にとどめる措置が肝要である。たとえば、(6)②の PATIENT は「動作により物理的な影響を被るもの」と定義されている。英語の hit は目的語名詞句に PATIENT をとる典型的な行為動詞とされるが、次の文を見てみよう。

(7) a. John　　hit　Tom　　many times.
　　AGENT(or [+volitional] AGENT)　PATIENT (or [+affected] THEME)
　b. John　　hit　the door　　lightly.
　　AGENT(or [+volitional] AGENT)　THEME (or [-affected] THEME)
　c. The wind　　hit　the door　　very hard.
　　AGENT (or [-volitional] AGENT)　PATIENT (or [+affected] THEME)

(7a)の目的語 Tom は確かに叩かれる行為により何らかの影響、たとえば、たんこぶを作る、を被るかもしれない。他方、(7b)の the door はこつこつ音をたてたとはしても、それ以上の物理的影響を受けることはないが、(7c)の the door は大いに影響を被り壊れるかもしれない。PATIENT か否かは、文中の他の要素、(7a)では many times、(7c)では very hard による意味の強化、「殴られたらどうなるか」というような常識や経験という語用論上の情報等によって決まってくる。Tom も the door も叩かれる対象であることに変わりはないのであるから、PATIENT を THEME に含み入れる、言い換えれば、THEME の下位意味役割と考えるの

が妥当であるように思われる。同様に、RECIPIENT や BENEFICIARY も意志を有するか否かで GOAL と区別されているだけで、利益を得るという点は副次的なものである。したがって、send の目的語に(8a, b)のような異なる意味役割を割り当てる必要はない。

(8) a. John sent a package to his wife.
RECIPIENT(or [+volitional] GOAL)
b. John sent a package to his office.
GOAL (or [-volitional] GOAL)

以上の考え方を踏襲していくならば、意味役割の数と種類は有意な程度に減らすことが可能である。ここで「有意な程度に」というのは、言語によってどうしても導入しなければ意味の記述に不備が出るような意味役割が想定されるからである。意味役割の下位区分を表すのに、Næss(2007)の提案した三つの二項意味素性(binary features)、[±affectedness]、[±volitionality]、[±instigation]のうち最初の二つを利用することができるだろう。さらに、[±extension]という素性を追加すれば、一定の幅を有する線型的な場である PATH を[+extensional] LOCATION として、面としての[-extensional] LOCATION から区別することができるのである。

(9)
① AGENT（行為主）
- [+volitional] AGENT
- [-volitional] AGENT = INSTIGATOR

② EXPERIENCER（経験主）

③ THEME（主題）
- [+affected] THEME =PATIENT
- [-affected] THEME

④ CAUSE（原因）

⑤ SOURCE（出所）

⑥ GOAL（行先）
- [+volitional, -affected] GOAL =RECIPIENT
- [+volitional, +affected] GOAL =BENEFICIARY
- [-volitional, -affected] GOAL

⑦ LOCATION（場所）
- [+extensional] LOCATION = PATH
- [-extensional] LOCATION

ただし、素性を明示する記述は、その必要のある場合にのみに限定してよい。通常は、AGENT、THEME、GOAL、LOCATION で事足りるはずである。ともあれ、(9)に特定言語に特有の意味役割が加わったとしても、10 以内には収まるのではないだろうか。

第二の問題点は、(4)で引用したθ基準に関係する。本当に一つの項にはたった一つの意味役割しか付与されないのだろうか。反例と考えられる文を、Anderson(1985:110)が挙げている。

(10) a. Frances　rolled　　the pencil across the floor.
　　Source of Action = AGENT　Moving Object=THEME

　　b. Frances　rolled across the floor.
　　Source of Action & Moving Object = AGENT & THEME

等式の左側は Anderson の、右側は本稿で用いているほぼ同じ意味役割を述べている。(10a)の Frances は行為の出所として AGENT を、目的語の the pencil はその行為を受ける THEME を担っている。一方、(10b)の Frances は AGENT であると同時にその行為の受け手として THEME でもある。このことから、Anderson は、次のような主張を提示する。

(11) 一つの項が二つ以上の意味役割を担ってもよい。

(11)はモンゴル語の補語の意味役割を扱う上で、言語事実に適ったものであることが明らかとなるであろう。

第三の問題点は、従来のθ理論などに見られる動詞中心の項と意味役割の一方向的な観点は、顕在的な格形を有する言語にそのまま適用できるのかというものである。むしろ、格要素が接続する名詞句に付与する意味役割と動詞自体が指定する意味役割という双方向的な観点を採用した方が、言語事実を的確にとらえられるように思われる。従来の理論では、専ら動詞が義務的な補語である項の数や意味役割の種類を決定するのに対し、双方向性の理論では、格要素に固有の意味役割と動詞の要求する意味役割とが一致することで初めて補語の義務性が確定すると考える。

双方向性を論じる上で、二つの原則を立てる必要がある。

(12)　形態格の意味役割付与の原則(Principle of Semantic Role Assignment by Morphological Case)：
　　主格を除く形態格は、動詞あるいは叙述的形容詞とは独立に、それが接続する名詞句に意味役割を付与することができる。

主格を除く理由は、多くの場合、この格が顕在的な形態を持たないばかりか、名詞句と結び付いた主格形の意味役割が動詞のタイプに依存するからである。一般的に、行為動詞(action verbs)であれば AGENT、知覚・認識・感情を表す心理動詞(psych-verbs)であれば EXPERIENCER、状態動詞(state verbs)であれば THEME を担っている。

もう一つの原則は、(13)である。

(13)　意味役割一致の原則(Principle of Semantic Role Agreement)：
補語が義務的な項であるためには、補語となる名詞句に付加する形態格の付与する意味役割と動詞あるいは叙述的形容詞が指定する意味役割とが双方向的(bidirectional)に一致しなければならない。

(13)の原則に従うなら、(14a)の名詞句は動詞の項と解釈されるが、(14b)はそのようには解釈されず、義務性のない付加語(adjunct)と認定される。

(14) a. [NP + Accusative<THEME>]　　[_____<THEME> + VERB]

AGREEMENT

b. [NP + Dative<GOAL>]　　[NA[1]<　> + VERB]

×

NO AGREEMENT

なお、形態格の付与できる意味役割は一つとは限らない。日本語の形態格は格助詞という前接語(enclitic)によって具現する。「を」格は前接する名詞句に(15a)のように THEME を付与することもあれば、(15b)のように LOCATION を付与することもあるが、各々、動詞の指定する意味役割と一致していれば、義務的な補語、すなわち、項と解釈することができる。

(15) a. 太郎は本を読みました。
[[本] + を<THEME>]　　[_____<THEME> + 読む]
AGREEMENT

b. 太郎は通りを歩いていました。
[[通り] + を<LOCATION>]　　[_____<LOCATION> + 歩く]
AGREEMENT

「を」格が固有に付与できる意味役割がこの二つであり、たとえば、GOAL を指定する動詞とは共起できない。

(16) *太郎は花子を感謝しました[2]。
[[花子] + を<THEME or LOCATION>]　　[_____<GOAL> + 感謝する]
× NO AGREEMENT

動詞「感謝する」は感謝の受け手=GOAL を補語として指定するのに対し、「を」格はこの意味役割を付与することができない。意味役割の一致が見られないので、(16)は不適格文と判定される。

動詞の意味役割の指定は義務的でなければならない。「遊ぶ」という動詞は一般に自動詞とされ、補語がなくてもそれ自体で適格な文を作るが、もちろん、何らかの格形をとる名詞句があってもよい。

(17) a. 太郎は遊んでいます。
　　b. 太郎は公園で遊んでいます。

(17b)の「で」格は LOCATION の意味役割を「公園」に付与するが、動詞「遊ぶ」には指定すべき意味役割がないのであるから、意味役割の一致は生じない。この場合、「公園で」は補語ではなく付加語と解釈される。

(18) [[公園] + で<LOCATION>]　　[NA < > + 遊ぶ]
　　↑―――― ×

動詞の側の意味役割の不在による一致の不成立は、(13)の原則に対する違反とは異なる。モンゴル語の分析をする中で意味役割の一致現象についての考察を深めていきたいが、ここではひとまず次のような条件を提示しておきたい。

(19) 意味役割一致の成立条件(Condition for Formation of Semantic Role Agreement)：
　　意味役割の一致が成立するためには、補語と動詞あるいは叙述的形容詞の双方に明示的な意味役割が存在しなければならない。

この条件から派生する事項は、次の通りである。

(20) 成立条件(19)から派生する事項 (Two Facts Derived from (19))：
　　a. 補語にも動詞あるいは叙述的形容詞にも明示的な意味役割が存在しているのに一致が成立しない場合には、当該文は不適格と判定される。
　　b. 補語に意味役割が付与されているにもかかわらず動詞あるいは叙述的形容詞の側に指定すべき意味役割が存在しない場合には、当該補語は付加語と認定される。

以下の考察で、モンゴル語の補語名詞句に現れる形態格と動詞との関係を意味役割の一致から分析し、どのような条件を満たせば義務的な項となるのか、あるいは任意的な付加語となるのかを検証していく。その際に、補語が項か付加語かの二分法的なカテゴリー分けで分類するよりも、補語としてなくてもよい、もしくはあってもよい、という風に中間段階を設

定し連続的にとらえるのが言語事実をよりよく説明してくれるということを提案したい。第2節では対格を、第3節では与位格を、第4節では奪格を、第5節では具格を、第6節では共同格を扱う。第7節は結論で、考察の結果をまとめ、今後の展望について言及する。

2. 対格形の補語(Accusative Complements)

モンゴル語の対格接尾辞-ijg、-g が名詞句に接続する場合[3]、橋本(1987, 1999)、山越(2012)が説明するように、次の意味上の原則が働く。

(21) 対格接尾辞付加の原則(Principle of Selection of Accusative Suffixes)：
一般に、補語名詞句の表す対象が特定的(specific)である場合に、当該の名詞句は対格接尾辞をとる。そうでない場合はゼロ形となる。

ゼロ形とは接尾辞が何も付かない形を指すが、対格接尾辞との対応を明確にするために、∅という接尾辞が付加すると仮定する。

(22) a. Bi ödör bür *nom* **unš**-i-dag.[4]
1SG:N day every book-∅ read-EP-HBT[5]
（私は毎日本を読みます。）<AD>[6]
b. Bi önöödör *ene nom-**ijg*** **unš**-i-na.
1SG:N today this+book-ACC read-PRS
（私はこの本を読みます。）<AD>

本稿の主旨は格に焦点を当てることにあるので、以下では対格接尾辞をとる補語を採り上げる。

2.1. THEME 補語(THEME Complements)

行為動詞から見てみよう。

(23) a. Ter *ene ažl-**ijg*** xurdan **xij**-sen.
3SG:N this+work-ACC quickly do-PF
（彼女はこの仕事を素早くしました。）<K&Ts. 370>
b. Či *ene olon gutl-ijn-x-aa ali neg-**ijg*** düü-d-ee **ög**-ööč!
2SG:N this+ many boots-G-EP-REF any one-ACC younger brother-D/L-REF give-IMP
（おまえはこのたくさんの靴の中からどれか一つを弟さんにあげなさい。）<AD>
c. *Očigdr-ijn ir-sen oyuutn-ij arvaad-**ijg*** ni negdl-ijn darga
yesterday-G come-PF student-G about ten-ACC 3POS cooperarive-G chief:N
duud-san.
call-PF

（昨日来た学生のうち 10 名ほどを組合長が呼びました。）<K&Ts.: 248>

d. Ter　***namajg***　**<u>batl-a-n daa</u>**-san.

3SG:N　1SG:ACC　guarantee(<confirm-EP-ASS insure)[7]-PF

（彼は私のことを保証してくれました。）<K&Ts.:373>

(23a-d)の太字・イタリック体の部分が対格接尾辞、太字・下線の個所が動詞である。対格接尾辞は、文法書では「動作の直接目的語を表すところに基本的な意味がある」（岡田 1989: 48）とあるように、典型的に THEME の意味役割を名詞句に付与する。一方、xij-「～をする」、ög-「～を与える」、duu-「～を呼ぶ」、batl-a-n daa-「～を保証する」は、それぞれ行為の対象を要求するのだから、やはり補語に THEME の意味役割を指定する。従来の文法書では他動詞(transitive verbs)とされる傾向にある動詞と言ってよいだろう。補語名詞句と動詞の意味役割の一致は、次のように図示できる。

(24) a. [[ene ažl] + ***ijg***<THEME>]　　[_____<THEME> + xij-]

AGREEMENT

b. [[ene olon gutl-ijn-x-aa ali neg] + ***ijg***<THEME>]　　[_____<THEME> + ög-]

AGREEMENT

c. [[Očigdr-ijn ir-sen oyuutn-ij arvaad] + ***ijg***<THEME>]　　[_____<THEME> + duud-]

AGREEMENT

d. [***namajg***]<THEME>　　[_____<THEME> + batlan daa-]

AGREEMENT

(23a-d)の各文において THEME 補語を省略すると、(25a-d)の不適格な文となってしまう。

(25) a. *Ter xurdan xij-sen.

b. *Či düü-d-ee ög-ööč!

c. *Negdl-ijn darga duud-san.

d. * Ter batl-a-n daa-san.

THEME 補語を項として要求する他の行為動詞には、次のようなものがある。

(26) avax “to take, to buy”; barimtlax “to follow”; bičix “to write”; zalgax “to join, to connect”; unšix “to read”,　xüleex “to wait for”, xarluulax “to reply, to answer”,　esergüücex “to resist, to protest”, unax “to ride”, dajrax “to run down”,　etc.

知覚(perception)、認識(recognition)、感情(emotion)など人間の内面で生ずる事象を表す動詞を心理動詞(psych-verbs)として扱う。THEME 補語をとる動詞の文例は、次の通りである。

(27) a. Xoyor čono *unt-a-ž* *baj-g-aa* *xüü-**g*** **xar**-žee.
two wolf:N sleep-EP-ICC be-EP-IMPF boy-ACC see-PPST
（二頭のオオカミは眠っている少年を見ました。）<L: 179>

b. Bi ***tüünijg*** günee **xündel**-deg.
1SG:N 3SG:ACC deeply respect-HBT
（私は彼女のことを深く尊敬しています。）<K&Ts.: 233>

c. *Uridijn cag-t* *bol* *xen č* *edelšgüj* *žalgal-**ijg*** övgön aav čini
once upon a time-D/L TOP anyone:N unenjoyable joy-ACC old father:N 2POS
odoo **edel**-ž baj-na.
now enjoy-ICC be-PRS
（昔では誰も味わえなかったような楽しみを老いた父親は今楽しんでいます。）<AD>

d. Bi *šine žüžigč-d-**ijd*** ix l **sonirx**-o-v.
1SG:N new actor-PL-ACC very just be interested in –EP-PST
（私は新人俳優たちに大いに興味を抱きました。）<AD>

(27a)は「見る」という知覚の、(27b)は「尊敬する」という認識の、(27c)は「喜ぶ」という感情の、(27d)は「興味を抱く」という認識の、それぞれ THEME を指定する。一方、補語名詞句は対格接尾辞により THEME を付与されている。その結果、(28a-d)で示すように意味役割の一致が成立する。

(28) a. [[unt-a-ž baj-g-aa xüü] + ***g***<THEME>] [_____<THEME> + xar-]
AGREEMENT

b. [***tüünijg***]<THEME> [_____<THEME> + xündel-]
AGREEMENT

c. [[Uridijn cag-t bol xen č edelšgüj žalgal] + ***ijg***<THEME>] [_____<THEME> + edel-]
AGREEMENT

d. [[šine žüžigč-d] + ***ijg***<THEME>] [_____<THEME> + sonirx-]
AGREEMENT

(27a-d)の各文において THEME 補語を取り除くと、(29a-d)の不適格な文となってしまう。

(29) a. * Xoyor čono xar-žee.
b. *Bi günee xündel-deg.
c. * Övgön aav čini odoo edel-ž baj-na.
d. *Bi ix l sonirx-o-v.

他に項としての THEME 補語を要求する心理動詞を(30)に記す。

(30) zövšööröx “to agree with, to approve”, xajrlax “to love”, dursax “to remember”, sanax “to think of”,　godmdoox “to annoy” etc.

状態動詞(state verbs)は ezlex ”to occupy, to take over”の一例のみがある。

(31) *Manaj　garg-ijn　xuuraj gazr-ijn　5,3 xuvi　buyuu 7 saya　garuj　am dörvölžin*
1PL:G　planet-G　dry　place-G　percent　or　million　more than　a square
*kilometr　talbaj-**g***　els　**<u>ezel</u>**-deg.
kilometer　area-ACC　sand　occupy-HBT
（私たちの惑星の乾いた土地の 5.3%、すなわち 700 万 km^2 以上の地域を、砂漠が占めています。）<K&Ts.: 304>

対格形補語は占有の対象を示す。

(32) [[・・・7 saya garuj am dörvölžin kilometr talbaj] + ***g***<THEME>]　　[_____<THEME> + ezel-]
AGREEMENT

(31)でも補語は項として解釈できるので、削除した場合には、不適格と判定される。

(33) *Els ezel-deg.

2.2. GOAL 補語(GOAL Complements)

動詞の意味自体に THEME 補語が含意される行為動詞が存在する。この動詞が対格形の補語をとる場合、その意味役割は THEME ではなく GOAL となる。

(34) a Či　*ene šoroo-**g***　**<u>usl</u>**-aaraj.
2SG:N this+ soil-ACC　water-OPT
（おまえはこの土地に水をやりなさい。）<AD>
b. Bi　***čamajg***　xeden　udaa　**<u>utasd</u>**-san.
1SG:N 2SG:ACC　several　times　phone-PF
（私はあなたに数回電話をしました。）<AD>

(34a)の動詞 usl-には「水を」が、(34b)の utasd-には「電話を」が THEME として含まれている。それぞれの文における対格形補語は、THEME の行先や受け手である GOAL の意味役割を担っているのである。

対格接尾辞が使役形動詞と共起する場合、その変化を受ける GOAL を補語に付与する例を観察することができる。使役構文は使役主(causer)から被使役主(causee)へある種の力が移譲されて、被使役主が何らかの状態変化を起こすか行為を行うことを表示する。いわば、被使役主はその力の行先であり受け手である。被使役主に対格形補語を用いることができるということは、対格から GOAL が付与されていることを意味するのである。

(35) a. Xubcas ugaax gazar *xuvcas xunar-**ijg*** **<u>cagaan bol-g</u>**-o-v.
laundry:N clothing-ACC white become-CST-EP-PST
（クリーニング屋が服を白くしました。）<AD>
b. Bid ***tüünijg*** tend **<u>yav-uul</u>**-san.
1PL:N 3SG:ACC there go-CST-PF
（私たちは彼をそこに行かせました。）<AD>

(35a)は状態変化使役構文で、被使役者の対格形補語「衣服」は白い状態にする対象であり受け手でもある。(35b)は行為使役構文で、被使役者の「彼」は使役の力の受け手であると同時に「行く」行為の主体でもある。ここでは、(11)の立場を採用して一つの補語に二つの意味役割が与えられると考えるだけではなく、動詞も二つの意味役割を指定できると仮定する。すると、(36a, b)のような両者の一致が成立する。

(36) a. [[xucas xunar] + ***ijg***$_{<GOAL/THEME>}$] [_____$_{<GOAL/THEME>}$ + cagaan bolg-]
AGREEMENT
b. [***tüünijg***$_{<GOAL/AGENT>}$] [_____$_{<GOAL/AGENT>}$ + yav-uul-]
AGREEMENT

意味役割が二つある場合、< A / B>のようにスラッシュで表記する。意味役割の一致により、補語が略される場合は不適格文が生じる。

(37) a. * Xubcas ugaax gazar cagaan bol-g-o-v.
b. *Bid tend yav-uul-san.

(34a, b)のように動詞自体が THEME を内包する動詞では(38a, b)に示すように補語に THEME を指定することはできない。

(38) a. [[us]-***ijg***$_{<THEME>}$] [_____$_{<THEME>}$ + ***us***l$_{<THEME>}$-] # us “water” [noun]
*us-ijg uslax “to put water”
water-ACC
b. [[uts] + ***ijg***$_{<THEME>}$] [_____$_{<THEME>}$ + ***utas***d$_{<THEME>}$-] # utas “telephone” [noun]

*uts-ijg　　utasdax “to call on the phone”
phone-ACC

この事実から、動詞は、たとえそれ自体の意味に含み入れられているにせよ、同じ意味役割を二度指定することができない。意味役割の一致が成立するためには、対格は(36a, b)からTHEME の他に GOAL を有すると考えられるので、(35a, b)では補語を形成する名詞句にこの意味役割を単独で付与する。一方、動詞はすでに THEME を内包させているので、これを外にある補語に要求することはできず、次の意味上の候補として、その行先の GOAL を指定するのである。対格は GOAL を付与できるのであるから、両者の間に意味役割の一致が保証され、適格な文が派生する。

(39) a. [[ene šoroo] + ***g***<GOAL>]　　[_____<GOAL> + ***us***l<THEME>-]
AGREEMENT
b. [[***čamajg***<GOAL>]　　[_____<GOAL> + ***utas***d<THEME>-]
AGREEMENT

一致を示す補語は項として解釈できるので、これを削除すると、(40a, b)のように不完全な文になってしまう。

(40) a. ?Či usl-aaraj!
b. ?Bi xeden udaa utasd-san.

(40a, b)が不適格“*”ではなく不完全“?”と容認度を上げて考えるのは、動詞自体が補語的な意味を含意しているので、意味の解釈が不十分ながら可能と判定できるからである。

ところが、対格が GOAL を付与しなければならない状況では、THEME ほどの安定性を示さない事例に遭遇する。

(41) a. 1993 on-d　Mongol　Uls-ijn　Yörönxijlögč　***namajg***　<<Altan gadas>>
year-D/L Mongolia State-G　President:N　1SG:ACC　Pole Star
odon-g-oor　**<u>šagn</u>**-a-san.
star-EP-INS　award-EP-PF
（1993 年にモンゴル国大統領が私に『北極星』勲章を授与してくれました。）<AD>
b. Bagš　***bidnijg***　mongol　xel-n-d[8]　sajn　**<u>surg</u>**-a-ž　baj-na.
teacher:N 1PL:ACC Mongolian language-n-D/L well study-EP-ICC be-PRS
（先生は私たちにモンゴル語を上手に教えてくれています。）<K&Ts: 120>

(41a)は対格形補語と具格形補語を、(41b)は対格形補語と与位格形補語をとる二項動詞構文(ditransitive verb constructions)と呼ばれる文である。しかしながら、文における各補語の位置づけには差異が見られる。

(42) a.? 1993 on-d Mongol Uls-ijn Yörönxijlögč <<Altan gadas>> odon-g-oor šagn-a-san.
b. *1993 on-d Mongol Uls-ijn Yörönxijlögč ***namajg*** šagn-a-san.

(43) a. Bagš mongol xel-n-d sajn surg-a-ž baj-na.
b. ?Bagš ***bidnijg*** sajn surg-a-ž baj-na.
c. ?* Bagš sajn surg-a-ž baj-na.

(41a)の文から対格形補語を削除した(42a)は不完全ながら容認できる文となる。一方、具格形補語を省いた(42b)は不適格文である。(41b)では、対格形補語を省略した(43a)は適格文、与位格形補語を除いた(43b)は不完全文と判定されるが、二つの補語とも削除した(43c)の容認度はかなり落ちる。(41a, b)のように「あってもよい」補語、あるいは「なくてもよい」補語が存在するとすれば、従来の研究で考えられてきた項か付加語かの二項区分は、少なくともモンゴル語に見られる言語事実を正しく反映していないように思われる。むしろ、補語の動詞との共起の上での義務性には、中間段階があるとした方がよいのではないだろうか。

(44) 義務性から見た補語の階層(Hierarchy of Complements in terms of Obligatoriness)：

← More obligatory	∇	Less obligatory →
Argument	Adjunctive Argument	Adjunct

(44)の階層に従えば、(41a, b)の対格形補語は中間に位置する付加語的項ということになる。この位置づけの補語は、みな、GOAL を担っていることに注目したい。

(45) a. [***namaig***<GOAL>] [[<<Altan gadas>> odon-g] + ***oor***<THEME>][9]
AGREEMENT
[_____<GOAL>_____<THEME> + šagn-]
b. [***bidnijg***<GOAL>] [mongol xel-n-***d***<THEME>]
AGREEMENT
[_____<GOAL> _____<THEME> + surg-]

(45a)の šagn-“to award”では対格形補語と動詞との一致は弱く働くのに対し、具格形補語とは通常の一致を成立させる。(45b)でも対格形の方が与位格形に比較して一致の度合いは弱いと考えられる[10]。

モンゴル語の対格には確かに THEME の他に GOAL もあるのだけれど、(36)の意味役割の二重性、(38)の意味役割内包型の特殊な動詞との共起性、(45)の一致の脆弱性から、安定しない性質の意味役割と考えられる。

3. 与位格形の補語(Dative-Locative Complements)

与位格の主な意味役割は、次の 6 つにまとめることができる。

(46) a. Bagš *oyuutan-**d*** angli xel zaa-dag. 【GOAL: [+volitional] GOAL = Recipient】
teacher:N student-D/L English:Ø teach-HBT
（先生は学生に英語を教えています。）<AD>
b. Dorž *surguuli-**d*** togl-o-ž baj-na. 【LOCATION】
Dorž:N school-D/L play-EP-ICC be-PRS
（ドルジは学校で遊んでいます。）<AD>
c. Ene xičeel 8 *cag-**t*** exel-deg. 【TIME】
this+ lesson:N hour-D/L begin-HBT
（この授業は 8 時に始まります。）<AD>
d. Muur *noxoj-**d*** bari-gd-a-v. 【AGENT】
cat:N dog-D/L catch-PSV-EP-PST
（猫が犬に捕えられました。）<AD>
e. Xüüxd-üüd *kino-n-**d*** yav-san. 【PURPOSE】
child-PL:N movie-n:D/L go-PF
（子供たちは映画に行きました。）<岡田 1989: 37>
f. Bid nar ger-eer-ee ***tand*** ix bayarl-a-ž baj-g-aa šüü. 【REASON】
1PL:N PL house-INS-REF 2SG:D/L very appreciate-EP-ICC be-EP-IMPF CNF
（家族共々、あなたに感謝しています。）<YA: 77>

(46a)は意志のある受け手に「教える」という行為の及ぶことを表す。従来、RECIPIENT とされたもので、文法役割は間接目的語(indirect object)である。(46b)は「遊ぶ」行為の行われている場所、(46c)は「授業が始まる」時間、(46d)は受動文の行為主、(46g)は行為の目的を、各々、表している。これらの意味役割が動詞との絡みでどのような補語として現れるのかを考察するのが、第 3 節の目的である。

3.1. GOAL 補語 (GOAL Complements)

行為動詞から見てみよう。

(47) a. Tanaj angi-d 2 oyuutan *xičeel-**d**-ee* **<u>beltg</u>**-e-ž baj-na.
1SG:G class-D/L student:N lesson-D/L-REF prepare for-EP-ICC be-PRS

（あなたのクラスでは二人の学生が授業（に向けて）の準備をしています。）
<AD>

b. Manaj uls *xar tamxi, mansuuruul-a-x bodis-ijn delxij-n gurvan*
1PL:G country:N opium:∅ stupefy-EP-NPS substance-G world-G three+
*konvenc-i-**d*** **negd**-sen.
convention-EP-D/L join-PF
（我が国はアヘンや麻薬に関する三つの協定に加盟しました。）<ZM 2001.6.18>

c. Bi ***čamd*** **tusl**-a-ya!
1SG:N 2SG:D/L help-VLNT
（私はあなたの手伝いをしましょう。）<K&Ts.: 376>

d. Bi xičeel deer *bagš-ijn-x*[11]*-aa asuult-a-n-**d*** büren
1SG:N lesson on teacher-G-x-REF question-EP-n-D/L completely
xarjuul-ž čad-aa-güj.
answer-ICC can-IMPF-NEG
（私は授業で先生の質問に完璧には答えることができませんでした。）<塩谷 2001: 181>

(47a)は「準備」の向かう行先を、(47b)は「加盟する」行為の受け手を、(47c)は「手伝い」の受ける対象を、(47d)は「答え」の向かう対象を、それぞれ、与位格形補語が担っている。これらの意味役割は、意志のあるなし、あるいは影響を被るか被らないかにかかわらず、すべて行為の行先ということで GOAL と捉えられるのである。

(48) a. [[xičeel] + ***d***$_{<GOAL>}$ + *ee*] [_____$_{<GOAL>}$ + beltg-]
AGREEMENT

b. [[xar tamxi,mansuuruul-a-x bodis-ijn delxij-n gurvan konvenc-i] + ***d***$_{<GOAL>}$]
AGREEMENT
[_____$_{<GOAL>}$ + negd-]

c. [[*čamd*$_{<GOAL>}$] [_____$_{<GOAL>}$ + tusl-]
AGREEMENT

d. [[bagš-ijn-x-aa asuult-a-n] + ***d***$_{<GOAL>}$] [_____$_{<GOAL>}$ + xarjuul-]
AGREEMENT

(47a-d)の動詞はすべて補語に GOAL を指定するのであるから、与位格が補語に付与する意味役割と一致する。したがって、補語の削除された文はすべて不適格と判定される。

(49) a. *Tanaj angi-d 2 oyuutan beltg-e-ž baj-na.

b. *Manaj uls negd-sen.

c. *Bi tusl-a-ya!

d. *Bi xičeel deer büren xarjuul-ž čad-san.

心理動詞と補語の間にも意味役割の一致が散見される。

(50) a. Bi　*xüüxen-**d***　ni　**durl**-a-ž　baj-na.
1SG:N　daughter-D/L 3POS　love-EP-ICC　be-PRS
（私は彼の娘に恋しています。）<AD>

b. Dorž　*möngö-n-**d***　**šun**-a-dag.
Dorž:N money-n-D/L　crave-EP-HBT
（ドルジはお金に執着しています。）<AD>

c. Bi　*tüünij*　*xurim-a-n-d*　*oč-i-ž*　*čad-a-x-güj-**d**-ee*
1SG:N 3SG:G wedding-EP-n-D/L　go-ICC can-EP-NPS-NEG-D/L-REF
xarams-a-ž　baj-na.
be sorry for-EP-ICC be-PRS
（私は彼の結婚式に行かれないことを残念に思っています。）<Baatarsukh 2009: 79>

d. Delxij üzsgelen temceen-d　türüül-sen xün-ijg　olimpijn avarga-taj
world exhibition competition-D/L win-PF　person-ACC　Olimpic champion-CMT
adiltg-a-n　üz-deg　bol　*uls-ijn-x-aa*　*ner-ijg*　*delxij-d*　*garg-a-ž*
compare-EP-ASS see-HBT CND country-G-x-REF name-ACC world-D/L take out-EP-ICC
*baj-x-a-**d***　manajd　ogt　**too**-dog-güj.
be-NPS-EP-D/L 1PL:D/L absolutely pay attention to-HBT-NEG
（世界公開競技会で優勝した人をオリンピックチャンピオンと比較してみると、その国の名を世界に知らしめていることに、我が国では全く注意を払っていないのです。）<Mongolian Online 1999.8.16>

(50a-c)は感情を表す動詞で、それぞれ特定の感情の行先を与位格形補語が担っている。(50d)は認識動詞であるが、「注意」の向かう対象が与位格形補語となっている。ここにも補語と動詞の意味役割の一致は観察される。

(51) a. [[xüüxen] + ***d***$_{<GOAL>}$]　[_____$_{<GOAL>}$ + durl-]
AGREEMENT

b. [[möngö-n] + ***d***$_{<GOAL>}$]　[_____$_{<GOAL>}$ šun-]
AGREEMENT

c. [[tüünij xurim-a-n-d oč-i-ž čad-a-x-güj] + ***d***<GOAL> + ee] [_____<GOAL> + xarams-]
AGREEMENT

d. [[uls-ijn-x-aa ner-ijg delxij-d garg-a-ž baj-x-a] + ***d***<GOAL>] [_____<GOAL> + too-]
AGREEMENT

一致すべき補語がないと、(52a-d)に見る通り、不適格文となる。

(52) a. *Bi durl-a-ž baj-na.
b. * Dorž šun-a-dag.
c. *Bi xarams-a-ž baj-na.
d. * Delxij üzsgelen temceen-d türüül-sen xün-ijg olimpijn avarga-taj adiltg-a-n üz-deg bol manajd ogt too-dog-güj.

これ以外の動詞として、次のものを加えることができるだろう。

(53) tomilox “to appoint”, ataarxax “to envy”, anxaarax “to pay attention to”, itgex “to believe”, talarxax “to thank”, tačaax “to desire”, uurlax “to get angry”, ergelzex “to doubt”, etc.

補語が GOAL を与えられていても、動詞との関係において義務性が乏しいように思われる例が存在する。

(54) a. Bi ***üünijg*** *öör-**t**-öö* **av**-san.
1SG:N this:ACC self-D/L-REF buy-PF
（私はこれを自分（のため）に買いました。）<K&Ts.: 263>
b. Bi ***čamajg*** *bagš-i-**d*** xel-ne šüü.
1SG:N 2SG:ACC teacher-EP-D/L say-PRS CNF
（私はおまえのことを先生に言いつけるぞ。）<K&Ts.: 335>
c. Bi ***tand*** ***saad*** **xij**-ž baj-na uu ?
1SG:N 2SG:D/L hinderance:Ø do-ICC be-PRS Q
saad xij- = obstruct
（私はあなたの邪魔をしていますか。）<K&Ts: 136>

(54a-c)のすべての文で与位格形の補語の他に対格形あるいはゼロ格形の補語が出現している。av- “to buy”、xel- “to say”、xij- “to do”は、第 2 節で考察した、典型的に補語に THEME を指定する行為動詞である。指定できる補語の数は一つであるから、当然、(55a-c)に見るように、与位格形補語との意味役割の一致は成立しない。

(55) a. [***üünijg***<THEME>]　[[*öör*] + ***t***<GOAL> + *öö*]　[_____<THEME> av-]

AGREEMENT

×

b. [***čamajg***<THEME>]　[[*bagš-i*] + ***d***<GOAL>]　[_____<THEME> + xel-]

AGREEMENT

×

c. [***tand***<GOAL>]　[***saad***<THEME>]　[_____<THEME> + xij-]

AGREEMENT

×

意味役割の一致の成立する THEME 補語と成立しない GOAL 補語とでは、削除した場合の容認度に違いが見られる。

(56) a. Bi ***üünijg*** av-san.　（私はこれを買いました。）
b. Bi ***čamajg*** xel-ne šüü.　（私はおまえのことを言いつけるぞ。）
c. Bi *saad* xij-ž baj-na uu ?　（私は邪魔をしましたか。）

(57) a. *Bi *öör-**t**-öö* av-san.
b. ?Bi *bagš-i-**d*** xel-ne šüü.
c. * Bi ***tand*** xij-ž baj-na uu?

(56a-c)では与位格形補語が省かれているが、どの文も適格と判断できる。(57a-c)は対格形補語の省略された文だが、不適格文か不完全文の読みしかできない。(57b)が不完全とされるのは、対格形補語が(44)の階層の「なくてもよい」という付加語的項(adjunctive argument)に当たるからであると考えられる。ただし、与位格形補語も対格形補語も削除された(58)は不適格文となる。

(58) *Bi xel-ne šüü.

付加語的項の出現条件に同一文中の二つの補語の支え合いがあると考えれば、xel-は二つの補語を指定する動詞であり、(45a, b)と同様に、GOAL の意味役割の一致が緩いと解釈してもよいかと思われる。この線に則ると、(55b)は(59)のように修正できる。

(59) [***čamajg***<THEME>] [[*bagš-i*] + ***d***<GOAL>] [_____<THEME> _____<GOAL> + xel-]

AGREEMENT

以上のような補語と動詞の間に GOAL における意味役割の一致が成立しないか、あったとしても弱い動詞及び叙述的形容詞には、次のものを挙げることができる。

(60) buruugaa xüleex “to admit one’s fault”, yarix “to talk”, šilžix “to shift to”, argagüj “inevitable”, tustaj “useful”, yavax “to go”, etc.

3.2. LOCATION 補語 (LOCATION Complements)

最初に行為動詞から考察しよう。

(61) a. Donoj neg udaa *uul-a-n-**d*** **abir**-čee.
Donoj:N one time mountain-EP-n-D/L climb-PPST
（ドノイは一度山に登りました。）<AD>

b. Eež bos-ood *galijn öröö-n-**d*** or-o-v.
mother:N get up-PCC kitchen-n-D/L enter-EP-PST
（母は起きてから台所に入りました。）

c. Bid üdees ugagš *nomijn san-**d*** **oč**-son.
1PL:N morning library-D/L go to-PF
（私たちは午前中図書館に行きました。）<AD>

d. Či margaaš *xural-**d*** **suu**-g-aaraj.
2SG:N tomorrow meeting-D/L attend-OPT
（あなたは明日会議に出席するようにね。）<AD>

(61a-d)はすべて一定の運動に関する動詞であるので、第一義的に運動の場所を要求する。これは、与位格が付与できる LOCATION と合致する。

(62) a. [[uul-a-n] + ***d***<LOCATION>] [_____<LOCATION> + abir-]

AGREEMENT

b. [[galijn öröö-n] + ***d***<LOCATION>] [_____<LOCATION> + or-]

AGREEMENT

c. [[nomijn san] + ***d***<LOCATION>]　　[_____<LOCATION> + oč-]

AGREEMENT

d. [[xural] + ***d***<LOCATION>]　　[_____<LOCATION> + suu-]

AGREEMENT

補語と動詞との間に意味役割の一致があるのだから、補語を削除した文はどれも、不適格文と解釈される。

(63) a. *Donoj neg udaa abir-čee.
b. * Eež bos-ood or-o-v.
c. * Bid üdees ugagš oč-son.
d. * Či margaaš suu-g-aaraj.

与位格形補語と状態動詞との間にも意味役割の一致を示すものがある。

(64) a. Bi　öngör-sön zun-aas　*Mongol-**d***　**amidar**-č　baj-na.
1SG:N pass-PF　summer-ABL Mongolia-D/L　live in-ICC be-PRS
（私は去年の夏からモンゴルで暮らしています。）<AD>
b. ***Manajd***　daxjaad　xoyor xün　l　**bagt**-a-na.
1PL:D/L　once more two　person:N just　be contained in-EP-PRS
（私たちの所にはもう一度二人だけが入ります。）<CD: 30>
c. Nijgm-ijn orčin　*gadaad-ijn sanxüü-g-ijn bajguullag-a-**d***　**toxir**-č
society-G environment:N foreign-G finance-EP-G organization-EP-D/L be suitable-ICC
baj-na.
be-PRS
（社会環境は外国の財務組織に適合しています。）<AD>

(65) a. [[Mongol] + ***d***<LOCATION>]　　[_____<LOCATION> + amidar-]

AGREEMENT

b. [***Manajd***<LOCATION>]　　[_____<LOCATION> + bagt-]

AGREEMENT

c. [[gadaad-ijn sanxüü-g-ijn bajguullag-a] + ***d***<LOCATION>] [_____<LOCATION> + toxir-]

AGREEMENT

(66) a. * Bi öngör-sön zun-aas amidar-č baj-na.

b. * Daxjaad xoyor xün l bagt-a-na.

c. * Nijgm-ijn orčin toxir-č baj-na.

このタイプに属する動詞には他に次のものがある。

(67) orolcox “to participate in”, tavix “to put”, unax “to fall”, yavax “to go”, suux “to live”, xevtex “to lie down”, buux “to stay”, zalgax “to attach”, etc.

LOCATION が文字通りの場所ではなく、比喩的に用いられ、何らかの事態や状態の発生する場を表示する例が比較的多く見られる。これには、心理動詞や状態動詞だけではなく、叙述的形容詞も加えることができる。

(68) a. Ev najramdal ge-sen üg *büx-n-ij zürx-e-n-**d*** tus-san.

friendship say-PF word:N all-n-G heart-EP-n-D/L hit upon-PF

（「友好」という言葉はすべての人の心を打ちました。）<MX5: 67>

b. Enxmaa conx-oor-oo širt-seer širt-seer *bodol sanaa-n-**d**-aa*

Enxmaa:N window-INS-REF stare at-CNT stare at-CNT thought thought-n-D/L-REF

umb-a-v.

wallow in-EP-PST

（エンフマーは窓越しにじっと見つめたまま、物思いにふけりました。）

<Baatarsukh 2009: 79>

(68a)の動詞 tus-は本来、süm tusax “to hit a target with a bullet”のように行為動詞であるが、ここでは「心を打つ」という比喩表現に現れ、心理動詞的な意味を帯びている。(68b)の umb-は心のあり様を表す心理動詞である。どちらも、当該の心理状態の生じる場を補語は担い、その場を動詞は指定している。

(69) a. [[büx-n-ij zürx-e-n] + ***d***<LOCATION>] [_____<LOCATION> + tus-]

AGREEMENT

b. [[bodol sanaa-n] + ***d***<LOCATION> + aa] [_____<LOCATION> + umb-]

AGREEMENT

意味役割の一致が成立するのであるから、与位格形補語のない形は不適格になる。

(70) a. * Ev najramdal ge-sen üg tus-san.
b. * Enxmaa conx-oor-oo širt-seer širt-seer umb-a-v.

状態については、(71a)のような動詞よりも、数の点では形容詞の例が多いように思われる。

(71) a. Bidnij üje-ijn xümüüs *ažil-**d**-aa* **garš**-i-x yum daa.
1PL:G period-G people:N work-D/L-REF get familiar with-EP-NPS ASR CNF
（私たちの時代の人々は、自分の仕事に熟知していますね。）<AD>
b. Mongol-čuud *mori-n-**d*** **garguu**.
Mongolian-PL horse-n-D/L excellent
（モンゴルの人たちは馬（に乗ること）に卓越しています。）<K&Ts.:85>
c. Bi *süü-tej caj-n-**d*** **durtaj**.
1SG:N milk-CMT tea-n-D/L fond of
（私はミルク茶が好きです。）<AD>
d. Ter *möngö-n-**d*** **ürelgen**.
3SG:N money-n-D/L spendthrift, wasteful
（彼女は金遣いが荒い。）<AD>

(71b-d)は述語となる形容詞であり、「卓越さ」、「好み」、「浪費」の生じる場を要求する。

(72) a. [[ažil] + ***d***<LOCATION> + aa]　[_____<LOCATION> + garš-]
AGREEMENT

b. [[mori-n] + ***d***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + garguu]
AGREEMENT

c. [[süü-tej caj-n] + ***d***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + durtaj]
AGREEMENT

d. [[möngö-n] + ***d***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + ürelgen]
AGREEMENT

(72a-d)の意味役割の一致によって補語の義務性が保証されるので、省略した文はすべて不適格と判定される。

(73) a. * Bidnij üje-ijn xümüüs garš-i-x yum daa.
b. * Mongol-čuud garguu.
c. *Bi durtaj.
d. *Ter ürelgen.

項としての与位格形補語を指定する状態形容詞には、他に次のものがある。

(74) muu “picky”, sajn “good at”, xajrtaj “fond of”, xamaagüj “having nothing to do with”, toxiromžtoj “appropriate”, toxiromžgüj “inappropriate”, xeregtej “necessary”, etc.

3.3. CAUSE、REASON、PURPOSE、TIME 補語 (CAUSE, REASON, PURPOSE, TIME Complements)

この補語を取る動詞は、同時に THEME 補語をも取る場合が多いが、義務性に関して容認度に違いがある。

(75) a. *Mön aduu, üxer, temee-**g** bogin-ijn teever,*
the same a herd of horses ox&cow camel-ACC short-G transportation
*unalg-a-**d*** **xeregl**-e-ne.
means of conveyance-EP-D/L use-EP-PRS
（まさにこの馬や牛やラクダを、短距離の交通手段に利用するのです。）<U: 44>

b. Bor *deed surguuli-d or-sn-ij-x-oo dursgal-**d** gualag cagaaxan **xos mod***
Bor:N college-D/L enter-PF-G-x-REF memory-D/L beautiful whitish birch tree:ø
zarjuul-a-n tari-san.
devote-EP-ASS plant-PF
（ボルは、大学に入学したことの記念に、美しい白っぽい白樺の木を植樹しました（lit. 捧げ植えました）。）<MX5: 143>

c. *Xövgüün-ijg amžilttaj sur-san-**d*** professor ***xarjuu talarxal*** **ilerxijl**-e-v.
son-ACC successfully study-PF-D/L professor:N reply:ø gratitude:ø express-EP-PST
（息子が勉学の成果をあげたことに、教授は返礼と感謝の意を表しました。）<AD>

(75a) は行為動詞と対格形の THEME 補語と与位格形の PURPOSE 補語を持つ文、(75b, c) は行為動詞と心理動詞に、それぞれ、与位格形の REASON 補語とゼロ格形の THEME 補語を備えた文である。二つの補語のうち、どちらか一方を削除すると容認度の相違が観察される。

(76) a. ? Mön aduu, üxer, temee-***g*** xeregl-e-ne.
b. ?Bor gualag cagaaxan ***xos mod*** zarjuul-a-n tari-san.
c. ? Professor ***xarjuu talarxal*** ilerxijl-e-v.

(76a-c)は、各々、与位格形補語を削除した文であるが、不完全さはあるものの、不適格とまではいかない。他方、(77a-c)のように THEME 補語を削除すると、容認性が落ち、不適格と判定される。

(77) a. * Bogin-ijn teever, unalg-a-***d*** xeregl-e-ne.
b. * Bor deed surguuli-d or-sn-ij-x-oo dursgal-***d*** zarjuul-a-n tari-san.
c. *Xövgüün-ijg amžilttaj sur-san-***d*** professor ilerxijl-e-v.

動詞 xeregl-、zarjuul-、ilerxijl-が二つの補語を指定できるとはいえ、補語の意味役割の一致の仕方には違いがあり、THEME 補語に較べて PURPOSE あるいは REASON 補語の一致は弱いように思われる。

(78) a. [[Mön aduu, üxer, temee] + ***g***<THEME>]　　[[bogin-ijn teever, unalg-a] + ***d***<PURPOSE>]
AGREEMENT
[_____<THEME>　_____<PURPOSE> + xeregl-]
b. [[deed surguuli-d or-sn-ij-x-oo dursgal-***d***<REASON>]　　[[gualag cagaaxan ***xos mod***<THEME>]
[_____<REASON>　_____<THEME> + zarjuul-]
c. [[Xövgüün-ijg amžilttaj sur-san] + ***d***<REASON>]　　[***xarjuu talarxal***<THEME>]
AGREEMENT
[_____<REASON>　_____<THEME> + irelxij-]

(78a-c)から、対格形あるいはゼロ格形の THEME 補語は意味役割の一致により項の資格を有するのに対し、与位格形の PURPOSE あるいは REASON 補語は意味役割の一致の弱い付加語的項と捉えるのがよいように見える。

与位格形補語一つだけを要求する動詞や形容詞でも、両者の意味役割の一致は弱い。

(79) a. *Sajxan　zövlölgöö ög-sön-**d***　bi　ix　**<u>bayarl</u>**-a-laa.
wonderful advice:ø give-PF-D/L 1SG:N very be glad-EP-RPST
（すばらしい助言を与えてくださったことに、私は大変感謝します。）<AD>
b. Bi　*ažil-**d**-aa*　**<u>yadar</u>**-san.
1SG:N work-D/L-REF be tired-PF
（私は自分の仕事に疲れました。）<AD>
c. Ter　xezeed　***üünd***　**<u>belen</u>** baj-dag.
3SG:N　always this:D/L　ready be-HBT
（彼はいつでもこのために準備しています。）<K&Ts.: 239>

(79a)は心理動詞であり、「感謝」の理由が補語に表される。(79b)も心理動詞で「疲労」の原因を補語が担っている。(79c)は状態の形容詞が述語の位置にあり、「準備」の目的に補語が立っている。これらの与位格形補語を削除すると、次のような適格文ができ上がる。

(80) a. Bi ix bayarl-a-laa. （私は大変感謝します/喜んでいます。）
b. Bi yadar-san. （私は疲れました。）
c. Ter xezeed belen baj-dag. （彼はいつでも準備しています。）

つまり、意味役割の一致が成立せず、補語はあってもよいが、あくまで動詞や形容詞の意味を補う付加語と捉えるのが妥当である。

(81) a. [[Sajxan zövlölgöö ög-sön] + ***d***_{<REASON>}] [NA + bayarl-]

b. [[ažil] + ***d***_{<CAUSE>} + aa] [NA + yadar-]

c. [***üünd***_{<PURPOSE>}] [NA + belen]

TIME 補語も、上記の例と同様に、動詞との間に意味役割の一致の成立しない、付加語であると考えられる。

(82) Dorž, Bugat-ijn övölžöön deer *nar šing-e-x-ijn üje-**d*** **xür**-čee.
Dorž:N Bugat-G winter camp site on sun:N set-EP-NPS-G time-D/L reach-PPST
（ドルジは、ボガトの冬営地に、日が沈む頃に到着しました。）<MX5: 124>

(82)の補語は TIME の意味役割を与位格に付与されているが、動詞自体には一致し得る意味役割の指定がない。そのため、補語を省いた(83)は申し分のない文であると解釈される。

(83) Dorž, Bugat-ijn övölžöön deer xür-čee.
（ドルジはボガトの冬営地に到着しました。）

(84) [[nar šing-e-x-ijn üje] + ***d***_{<TIME>}] [NA + xür-]

与位格は、(46c)、(46e)、(46f)に見るように、固有に PURPOSE、CAUSE/REASON、TIME の意味役割を付与できるにもかかわらず、動詞や形容詞の側に同じ意味役割の指定がないか、あったとしても一致の程度が弱いため、GOAL や LOCATION のように項としての補語を形成することができないのである。

4. 奪格形の補語 (Ablative Complements)

モンゴル語の奪格接尾辞-aas[4]には、次のような意味役割がある[12]。

(85) a. Xičeel najman cag-***aas*** exel-deg. 【SOURCE】
lesson:N eight+ hour-ABL begin-HBT
（授業は 8 時から始まります。）

b. Dorž ažl-***aas*** berxšee-ž baj-na. 【CAUSE/REASON】
Dorž:N work-ABL be embarrassed-ICC be-PRS
（ドルジは仕事に困っています。）<AD>

c. Dorž ***nadaas*** xoyor düü. 【REFERENCE】
Dorž:N 1SG:ABL two younger brother
（ドルジは私より 2 歳年下です。）<岡田 1989: 61>

d. Ene xool-n-***oos*** zoogl-ooroj. 【PARTITIVE THEME】
this+ meal-n-ABL have a meal-OPT
（この食事を[料理の一部分から]お召し上がりください。）<岡田 1989: 61>

(85a)は時間の起点＝出所を、(85b)は「困る」理由を、(86c)は比較の基準を、(86d)は部分的な対象を、奪格が補語名詞句に与えている。これらの意味役割が、動詞や形容詞との関係でどのように振る舞うのかを考察することが、本節の主な目的である。

4.1. THEME 補語 (THEME Complements)

最初に、行為動詞の例から検討する。

(86) a. Alivaa asuudl-ijg uridčil-a-n xar-ž toocool-ž arga xemžee
any problem-ACC do in advance-EP-ASS see-ICC account-ICC way:ø method:ø
av-a-x ni *učir-č* *bol-o-x* *ayuul gamšg-**aas***
take-EP-NPS 3POS come across-ICC occur-EP-NPS disaster-ABL
<u>sergijl</u>-e-x gol arga šüü dee.
prevent-EP-NPS main way:ø CNF CNF
（どのような問題であれ、前もって調べて考えて対策をとることは、突発的に起こる災害を避ける主要な方法なんですよね。）<AD>

b. Xišgee xüüxen duu alg-a-ž *Zorig-ijn* *gar-**aas*** **<u>šüür</u>**-e-v.
Xišgee girl:N screem-EP-ICC Zorig-G hand-ABL grab-EP-PST
（ヒシュゲーちゃんは悲鳴をあげて、ゾリグの手をつかみました。）<AD>

c. Bi *ajl-ijn ger-**ees*** **<u>bari-lc</u>**-aad ir-lee.
1SG:N a group of tents-ABL build-COOP-PF
（私は他の人と一緒にアイルの天幕の一部を建ててきました。）
<塩谷 2007: 172>

(86a)の奪格形補語は、「避ける」行為の THEME である。(86b)は手の一部をつかんだことを、(86c)は「アイル（いくつかの天幕から成る家族集団）」の天幕の一部を設置したことを述べている。(86b)と(86c)とも THEME の一部分を表しているのである。一部分ではなく全体に焦点を当てる場合には、補語は奪格形ではなく対格形になる。

(87) a. Bürged *ter* *šuvuuxaj-**g*** **<u>šüür</u>**-e-v.
eagle:N that+ bird-ACC snatch-EP-PST
（鷲がその小鳥をわしづかみにしました。）<AD>

b. Bi *ter* *ger-**ijg*** **<u>bari-lc</u>**-san.
1SG:N that+ tent-ACC build-COOP-PF
（私は他の人と一緒にその天幕を建てました。）<AD>

(87a)では小鳥全体がわしづかみにされたのであり、(87b)では天幕全体を設置したのである。

(88) a. [[učir-č bol-o-x ayuul gamšg] + ***aas***<THEME>] [_____<THEME> + sergil-]
AGREEMENT

b. [[Zorig-ijn gar] + ***aas***<PARTITIVE <u>THEME</u>>] [_____<THEME> + šüür-]
AGREEMENT

c. [[ajl-ijn ger] + ***ees***<PARTITIVE <u>THEME</u>>] [_____<THEME> + bari-lc-]
AGREEMENT

(88a)の意味役割の一致において補語の THEME に PARTITIVE の含みがあるか否かについてはよくわからない。(88b, c)では、奪格の PARTITIVE THEME の THEME に焦点を当てたものと、動詞の指定する THEME が一致すると考えられる。

意味役割の一致があるのだから、補語の省略は不適格文を生じさせる。

(89) a. *Alivaa asuudl-ijg uridčil-a-n xar-ž toocool-ž arga xemžee sergijl-e-x gol arga šüü dee.

b. * Xišgee xüüxen duu alg-a-ž šüür-e-v.

c. *Bi bari-lc-aad ir-lee.

状態動詞は一例だけ見つかった。

(90) Oxin ni öglöö ert ser-sen-güj, *xičeel-**ees**-ee* **xožimd**-o-x
daughter:N 3POS morning early wake up-PF-NEG lesson-ABL-REF be late-EP-NPS
šax-žee.
be almost about to-PPST
（彼の娘は朝早く起きなかったので、授業に遅れるところでした。）<AD>

奪格形補語は THEME の意味役割を担い、動詞は遅れる対象として THEME を指定する。その結果、両者の間に一致が成立する。

(91) [[xičeel] + ***ees***<THEME> + ee]　　[_____<THEME> + xožimd-]
AGREEMENT

このタイプには共同行為接尾辞(cooperative action suffix)の-lc-を含む動詞が数多く見受けられる。

(92) suralcax “to study in a group”, xagalcax “to break to pieces together”, ugaalcax “to wash together”, etc.

これは、主語の行為主が他の複数の行為主と一つの行為を行うことの内に、その行為の一部分を担当するという含意が生じ易いためであると考えられる。つまり、奪格の PARTITIVE THEME と相性がよいのである。

4.2. CAUSE/REASON 補語 (CAUSE/REASON Complements)

CAUSE/REASON 補語を要求する動詞は、知覚、認識、感情を表示する心理動詞に限られる。

(93) a. Bi *xar zud-**aas*** **sürd**-e-ž baj-na.
1SG:N severe snowless cold weather-ABL be afraid-EP-ICC be-PRS
（私は黒嵐を恐れています。）<AD>

b. Ter *ta nar-**aas*** **ič**-deg.
3SG:N 2SG-PL-ABL be embarrassed-HBT

（彼女はあなたたちに困惑しています。）<K&Ts.: 260>

c. *Burxan-ij üg-ijg xuurmagl-a-ž damžuulagč-d-**aas*** **<u>bolgoomžil</u>**.

God-G word-ACC deceive-EP-ICC transmitter-PL-ABL pay attention (not to):$ø_{IMP}$

（神の言葉を偽って伝える者たちに注意しなさい。）<Bible: 14>

(94) a. [[xar zud] + ***aas***<CAUSE>] [_____<CAUSE> + sürd-]

AGREEMENT

b. [[ta nar] + ***aas***<CAUSE>] [_____<CAUSE> + ič-]

AGREEMENT

c. [[Burxan-ij üg-ijg xuurmagl-a-ž damžuulagč-d] + ***aas***<CAUSE>]

AGREEMENT

[_____<CAUSE> + bolgoomžil-]

橋本(1998: 30-31)で言及されたように、奪格形は主語の「心理状態を引き起こす誘因となるものを」指している。一方、心理動詞は主語の心理状態を引き起こす要因を指定するのであるから、(94a-c)に図示したように、両者の間には意味役割の一致が構成される。それゆえ、奪格形補語を削除した(95a-c)はすべて不適格との判断を受ける。

(95) a. *Bi sürd-e-ž baj-na.

b. *Ter ič-deg.

c. * Bolgoomžil.

このタイプの動詞には、(96)に挙げたものが加わる。

(96) zovox “to suffer, to worry”, zevüücex “to shudder at, to be disgusted with”, tatgalzax “to refuse”, ujdax “to get tired of”, uurlax “to be angry at”, ajx “to be afraid of”, emeex “to fear”, berxšeex “to consider difficult”, xamgaalax “to protect”, etc.

4.3. SOURCE 補語 (SOURCE Complements)

奪格は、起点や出所を示す意味役割 SOURCE を持っている。一方、SOURCE を指定する述語には、行為動詞や状態動詞だけではなく、状態形容詞も含まれる。

(97) a. Ter *avtobus-n-**aas*** **<u>buu</u>**-laa.

3SG:N bus-n-ABL get off-RPST

（彼はバスから降りました。）<AD>

b. Düü *ger-**ees*** **<u>gar</u>**-laa.

younger brother:N house-ABL go out-RPST

（弟は家を出ました。）

c. Delgerengüj anket　　bol *olon*　*asuult-**aas***　　**<u>bürd</u>**-e-ne.
detailed　　questionnaire:N TOP many question-ABL consist of-EP-PRS
（詳細なアンケートは、たくさんの質問で構成されています。）<AD>

d. *Manaj angi-ijn oyuutn-**aas***　2 xün　　**<u>dutuu</u>**　baj-na.
1PL:G class-G student-ABL　person:N short of　be-PRS
（私たちのクラスの学生の内、二人が足りません。）<AD>

(97a, b)は行為動詞と、(97c)は状態動詞と、(97d)は状態形容詞と、奪格形補語が、それぞれ、共起する文である。

(98) a. [[avtobus-n] + ***aa***<SOURCE>]　　[_____<SOURCE> + buu-]
AGREEMENT

b. [[ger] + ***ees***<SOURCE>]　　[_____<SOURCE> + gar-]
AGREEMENT

c. [[olon asuult] + ***aas***<SOURCE>]　　[_____<SOURCE> + bürd-]
AGREEMENT

d. [[Manaj angi-ijn oyuutn] + ***aas***<SOURCE>]　　[_____<SOURCE> + dutuu]
AGREEMENT

SOURCE を介しての意味役割の一致により、これを担う補語は項の身分を持つことになるので、省かれると不適格な文になる。

(99) a. *Ter buu-laa.
b. * Düü gar-laa.
c. * Delgerengüj anket bol bürd-e-ne.
d. *2 xün dutuu baj-na.

このタイプの動詞には、他に次のものがある。

(100) irex “to come”, büreldex “to form”, etc.

奪格形補語で義務性が弱いと考えられる例が、行為動詞であれ状態動詞であれ、比較的多く観察される。

(101) a. Bi *zav-**ijg*** tatal-saar *us-n-**aas*** **garg**-a-v.
1SG:N boat-ACC pull repeatedly-CNT water-n-ABL cause to get out-EP-PST
（私はボートを何度も引っ張って、水から出しました。）<K&Ts.: 135>
b. Bi *najz-**aas**-aa* ***möngö*** **zeel**-e-v.
1SG:N friend-ABL-REF money:ø loan-EP-PST
（私は友人からお金を借りました。）<K&Ts.: 92>
c. Bid *udam surd-**aas*** ni ***ündijg*** **tani**-dag.
1PL:N lineage-ABL 3POS this:ACC know-HBT
（私たちは彼女の家系からこのことを知っています。）<YA: 29>
d. Zarim törl-ijn aalz *neg ex-**ees*** **tör**-dög.
several baby-G spider:N one mother-ABL be born-HBT
（数匹の赤ちゃんグモが一匹の母親から生まれるのです。）<ÖS 1999.10.21.>

各文から奪格形補語を削除した(102a-d)は、すべて適格な文である。

(102) a. Bi *zav-**ijg*** tatal-saar garg-a-v.
（私はボートを引っ張り続けて出しました。）
b. Bi ***möngö*** zeel-e-v.
（私はお金を借りました。）
c. Bid ***ündijg*** tani-dag.
（私たちはこのことを知っています。）
d. Zarim törl-ijn aalz tör-dög.
（数匹の赤ちゃんグモが生まれています。）

(102a-c)は対格形あるいはゼロ格形の補語も取るが、これを省くと、(103a-c)に見るように、不適格な文となる。

(103) a. *Bi tatal-saar *us-n-**aas*** garg-a-v.
b. * Bi *najz-**aas**-aa* zeel-e-v.
c. * Bid *udam surd-**aas*** ni tani-dag.

(101d)は動詞に補語を指定する力のない、いわゆる自動詞(intransitive verbs)と考えられる。

以上のことから、対格形/ゼロ格形補語は項であるのに対し、奪格形補語は付加語であると理解できる。意味役割の一致は、対格の付与する THEME と動詞の指定する THEME との間で成立する。もう一つの奪格形補語については、それが担う SOURCE に対応する意味役割が動詞の側に存在しないので、一致は起こらないのである。

(104) a. [[zav] + ***ijg***<THEME>]　[[us-n] + ***aas***<SOURCE>]　[_____<THEME> + garg-]

AGREEMENT

b. [[najz] + ***aas***<SOURCE> + aa]　[***möngö***<THEME>]　[_____<THEME> + zeel-]

AGREEMENT

c. [[udam surd] + ***aas***<SOURCE>]　[***üünijg***<THEME>]　[_____<THEME> + tani-]

AGREEMENT

d. [[neg ex] + ***ees***<SOURCE>]　[NA + tör-]

項としての THEME 補語と付加語としての SOURCE 補語の現れる動詞には、(105)のようなものがある。

(105) avax “to take”, avrax “to save”, idex “to eat”, olox “to find (out)”, ögöx “to give”, etc.

自動詞には、exlex “to begin”などがある。

4.4. REFERENCE 補語 (REFERENCE Complements)

この意味役割は(9)には挙げられていないが、奪格形補語と述語の関係を見る上で重要なものである。

(106) REFERENCE（基準；指示点）：比較対象の基点となるもの

REFERENCE を指定するのは状態動詞か形容詞である。

(107) a. Bold　gancxan negxen　onoo-g-oor　*Baatar-**aas***　**dut**-a-v.
Bold:N only　one-DIM point-EP-INS Baatar-ABL be short-EP-PST
（ボルドはたった一つの点でバータルより劣っていました。）<K&Ts.: 250>

b. Ažil-taj　učr-aas　*yav-a-x-**aas***　**argagüj**　ee.
work-CMT reason-ABL go-EP-NPS-ABL unavoidable CNF
（仕事があるので、行くしかないですね。）<T: 24>

c. Bat　üünijg　olon unš-san　boloxoor ***nadaas***　**ilüü**　med-e-ž　baj-na.
Bat:N this:ACC many read-PF　because 1SG:ABL more than know-EP-ICC be-PRS
（バトはこれを何回も読んだので、私よりよく知っています。）<AD>

d. German xel *Mongol* *xel-n-**ees*** ix **<u>yalgaataj</u>**.
German language:N Mongolian language-n-ABL very different
（ドイツ語はモンゴル語と大変異なっています。）<AD>

(107a)は状態動詞、(107b, c)は形容詞であり、すべて意味的に比較を含意しており、奪格形補語は比較の基準(107a, c, d)、もしくは指示点(107b)を表示している。この基準もしくは指示点が不在であると、不完全な文か不適格な文を作り出してしまう。

(108) a. ? Bold gancxan negxen onoo-g-oor dut-a-v.
b. ? Ažil-taj učr-aas argagüj ee.
c. ? Bat üünijg olon unš-san boloxoor ilüü med-e-ž baj-na.
d. * German xel ix yalgaataj.

ただし、(108d)を除いて、完全に不適格というよりは、文の完成度が低いとの印象を与える。奪格形補語が「なくてもよい」という形で付加語的項として機能していると考えることが可能である。

(109) a. [[Baatar] + ***aas***<REFERENCE>] [_____<REFERENCE> + dut-]
AGREEMENT
b. [[yav-a-x] + ***aas***<REFERENCE>] [_____<REFERENCE> + argagüj]
AGREEMENT
c. [***nadaas***<REFERENCE>] [_____<REFERENCE> + ilüü]
AGREEMENT
d. [[Mongol xel-n-] + ***ees***<REFERENCE>] [_____<REFERENCE> + yalgaataj]
AGREEMENT

比較構文であっても、必ずしも、形容詞に補語の指定ができるわけではない。元々比較の意味を内包していない形容詞が比較構文に現れると、Goldberg(1995, 2006)の構文文法(Construction Grammar)が語るように、 構文自体の力によって主語に被比較主、補語に比較主を配置することになるのである。

(110) a. Minij öröö *činij* *öröö-n-**öös*** **<u>tom</u>**.
1SG:G room:N 2SG:G room-n-ABL big
（私の部屋はおまえの部屋より大きい。）<K&Ts.: 92>
b. Bömbör *bömbög-n-**öös*** **<u>xüčtej</u>**.
drum:N ball-n-ABL powerful
（太鼓はボールより力強い。）<MX5: 165>

c. Ta　***nadaas***　**nastaj**.
2SG:N　1SG:ABL　old
（あなたは私より年上です。）<K&Ts.: 215>

(110a-c)は、被比較主に主格形主語、比較主に奪格形補語、比較の焦点に形容詞を配置した典型的な比較構文である。ここから奪格形補語を削除した文は、叙述文としてすべて適格である。

(111) a. Minij öröö tom.
（私の部屋は大きい。）
b. Bömbör xüčtej.
（太鼓は力強い。）
c. Ta nastaj.
（あなたは高齢です。）

(107a-d)の各述語がその意味に REFERENCE を含意しているのに較べ、(111a-c)の形容詞にはそのような含意はない。対象の形状や性質などを記述するだけである。普通の形容詞が比較で用いられるのは、専ら、比較構文という構文の力による。他方、奪格は独自に REFERENCE を、接続する名詞句に付与できるので、補語だけがその意味役割を持つのである。

(112) a. [[činij öröö-n] + ***öös***<REFERENCE>]　　[NA + tom]

b. [[bömbög-n] + ***öös***<REFERENCE>]　　[NA + xüčtej]

c. [[***nadaas***<REFERENCE>]　　[NA + nastaj]

(112a-c)に見るように、意味役割の一致は成立しないのだから、奪格形補語は付加語と位置づけられる。

4.5. GOAL 補語 (GOAL Complements)

意外に思われるが、奪格は GOAL、とりわけ[+volitional] GOAL=RECIPIENT を有している。ただし、この意味役割は例外的に「頼む、尋ねる」の意味を表す動詞とのみ共起する。

(113) a. Arga yad-aad bi ***tanaas*** ***möngö*** **guj**-ž baj-na.
method:ø be hardly able to-PCC 1SG:N 2SG:ABL money:ø ask-ICC be-PRS
（どうしようもなくなって、私はあなたにお金を頼みに来ました。）<T: 24>
b. Bi *bagš-**aas*** ***xičeel*** **asuu**-san.
1SG:N teacher-ABL lesson:ø ask-PF
（私は先生に授業のことを尋ねました。）<AD>

(113a, b)は共に、奪格形とゼロ格形の二つの補語を持つ文である。この内、奪格形補語を削除した文は適格と判断される。

(114) a. Arga yad-aad bi ***möngö*** guj-ž baj-na.
（どうしようもなくなって、私はお金を頼みに来ました。）
b. Bi ***xičeel*** asuu-san.
（私は授業のことを尋ねました。）

ゼロ格形補語の方を省いた文は解釈できるとしても、不完全さは残る。

(115) a. ?Arga yad-aad bi ***tanaas*** guj-ž baj-na.
（どうしようもなくなって、私はあなたに頼みに来ました。）
b. ? Bi *bagš-**aas*** asuu-san.
（私は先生に尋ねました。）

二つの補語を除いてしまうと、不適格文となる。

(116) a. *Arga yad-aad bi guj-ž baj-na.
b. *Bi asuu-san.

(114)、(115)、(116)から、gujx も asuux も二つの補語は取れるものの、THEME を担うゼロ格形補語の必須度が高いのに対し、GOAL の奪格形補語は必須度が低い。ただし、これは一つの文で二つの補語を較べた場合の相対的な性質のもので、THEME 補語のない時には、GOAL 補語があれば容認度は上がるのである。

(117) a. [***tanaas***<GOAL>] [***möngö***<THEME>] [(_____<GOAL>) _____<THEME> + guj-]
AGREEMENT

b. [[bagš] + ***aas***<GOAL>]　　[***xičeel***<THEME>]

AGREEMENT

[(_____<GOAL>)　_____<THEME> + asuu-]

(117a, b)が示すように、ゼロ格形の THEME 補語は項である一方で、奪格形の GOAL 補語は付加語的項である。

ここで、なぜ GOAL を付与するのが与位格ではなく、奪格なのかという疑問が残る。奪格は(82a)のように基点や出所を示す SOURCE を付与できるのであって、着点を表す GOAL とは意味的に正反対の関係にあるからである。正直なところ、現段階ではよくわからないが、ひょっとしたら、モンゴル語の「尋ねる、頼む」型の動詞は、依頼する相手の依頼後の行為に焦点を当てているのかもしれない。依頼された相手は依頼内容を受けて一定の行為を行う。すなわち、依頼相手は、依頼対象の受け手であると同時に行為の出所でもあるわけである。そのように仮定するなら、「尋ねる、頼む」型の動詞は、GOAL ではなく SOURCE の意味役割を備えた補語を任意に指定することになり、奪格の付与する意味役割と一致する。

(118) [[NP] + -***aas***</SOURCE>]　　[(_____<SOURCE>)　_____<THEME> + guj-/asuu-]

AGREEMENT

このように考えれば、特別の動詞に限って意味役割の一致を保証するためにだけ、GOAL という怪しい意味役割を奪格のリストに追加することは回避できる。もっとも、回避のために動詞の焦点の当て方云々を提示したとも言えるわけで、更なる関連したデータを見つけ出し検証する必要があろう[13]。

5. 具格形の補語 (Instrumental Complements)

具格に複数の意味があることは、岡田(1989: 73-75)や橋本(2002)で詳述されている。ここでは、動詞、形容詞の補語と関連する用法とそれに割り振られる意味役割を中心に見ておこう。

(119) a. Ene　uul　*an amitn-**aar***　elbeg.　【THEME】
this+ mountain:N game animal-INS abundant
（この山は狩猟動物が豊富です。）<L: 206>

b. Bat　*öng-ijn xarandaa-g-**aar*** zurag　zur-a-v.　【INSTRUMENT】
Bat:N color-G pencil-EP-INS picture:ø draw-EP-PST
（バトは色鉛筆で絵を描きました。）

c. *Oj-d*　*baj-g-aa*　*zam-**aar***　neg mori-toj　xün　yav-ž　baj-na.
forest-D/L be-EP-IMPF road-INS one horse-CMT person:N go-ICC be-PRS

【LOCATION: [+extensional] LOCATION = PATH】
（森にある道を一人の馬に乗った人が進んで行きます。）<橋本 2002: 119>

d. Ter *mongol* *xel-n-ij* *bagš-**aar*** arvan žil ažill-a-v. 【STATUS】
3SG:N Mongolian language-n-G teacher-INS ten+ year work-EP-PST
（彼はモンゴル語の教師として 10 年仕事をしました。）<Street 1962: 218>

e. *Oroj-g-**oor*** surguuli deer neg üdešleg-tej. 【TIME】
evening-EP-INS school:ø on one party-CMT
（晩に学校でパーティーがあります。）<岡田 1989: 73>

(119a)は豊富である対象を、(119b)は絵を描く手段を、(119c)は進んで行く場所を、(119d)はモンゴル語の教師という職業を、(119e)はパーティーの催される時間を、各々、表示している。以下では、意味役割の一致の観点から、具格形補語と動詞の相互関係を考察していく。

5.1. THEME 補語 (THEME Complements)

具格が名詞句に THEME を付与する事例から採り上げる。

(120) a. Ter *xöl bömbög-**öör*** **<u>xičeell</u>**-e-sen.
3SG:N soccer-INS study in class-EP-PF
（彼はサッカーを授業で学びました。）<Baatarsukh 2009: 167>

b. Bid *šalgalt-aa* *margaaš* *ög-ö-x-**öör*** **<u>bol</u>**-o-v.
1PL:N exam-REF tomorrow give-EP-NPS-INS become-EP-PST
（私たちは、試験を明日受けることになりました。）<AD>

c. Zandan *xüü-g-**eer**-ee* **<u>baxarx</u>**-dag.
Zandan:N son-EP-INS-REF be proud of-HBT
(ザンダンは自分の息子を誇りに思っています。) <Baatarsukh 2009: 57>

d.Ene xün-ij amidral *eldev* *sonin* *yavdl-**aar*** **<u>düüren</u>**.
this+ person-G life:N various interesting event-INS full
（この人の人生は様々な面白い出来事に満ちています。）<AD>

(120a)は行為動詞、(120b)は起動動詞、(120c)は心理動詞、(120d)は状態形容詞が、それぞれ、具格形の補語と共起している。この補語は、THEME の意味役割を与えられている。

(121) a. [[xöl bömbög] + ***öör***$_{<THEME>}$] [_____$_{<THEME>}$ + xičeell-]
AGREEMENT

b. [[šalgalt-aa margaaš ög-ö-x] + ***öör***<THEME>]　　[_____<THEME> + bol-]

AGREEMENT

c. [[xüü-g] + ***eer***<THEME> + ee]　　[_____<THEME> + baxarx-]

AGREEMENT

d. [[eldev sonin yavdl] + ***aar***<THEME>]　　[_____<THEME> + düüren]

AGREEMENT

(121a-c)で見るように、補語と述語の意味役割の間に一致が成り立つのであるから、この補語は項と位置づけられ、削除すると不適格な文を作り出す。

(122) a. *Ter xičeell-e-sen.

b. *Bid bol-o-v.

c. *Zandan baxarx-dag.

d. * Ene xün-ij amidral düüren.

このタイプに入る述語には、次のものがある。

(123) šagnax “to award”, šijdex “to decide”, bayan “rich”, ix “much”, xovor “rare, scarce”, etc.

5.2. INSTRUMENT/MANNER 補語 (INSTRUMENT/MANNER Complements)

具格の中心的な意味役割と考えられる INSTRUMENT もしくは MANNER を担う補語と動詞との意味役割の一致を示す例は、手元に一つしかない。

(123) Bi　*can-**aar***　**galg**-a-x　durtaj.

1SG:N ski-INS　slide-EP-NPS fond of

（私はスキーで滑るのが好きです。）<AD>

(124) [[can] + ***aar***<INSTRUMENT>]　　[_____<INSTRUMENT> + galg-]

AGREEMENT

したがって、補語がないと、不適格になる。

(125) *Bi galg-a-x durtaj.

ところが、(123)のような文は例外で、ほとんどの INSTRUMENT/MANNER 補語は、この意味役割を指定しない動詞と一緒に出現する。

(124) a. Mužaan xün *yuu-g-**aar*** ***tasgaaltaj tavjoor*** **xij**-deg ve?
carpenter:N what-EP-INS a set of shelves:ø make-HBT Q
（大工さんは何を使って棚を作りますか。）<AD>
b. Cerg-üüd *xori* *xorin* *egnee-g-**eer*** **žags**-žee.
soldier-PL:N twenty twenty+ row-EP-INS be lined up
（兵士たちは 20 名ずつ隊列を組んで整列しました。）<K&Ts.: 251>

(124a)にはINSTRUMENTを表す具格形補語とTHEMEを表すゼロ格形補語が表れているが、動詞との関係での必須度には違いが見られる。

(125) a. Mužaan xün ***tasgaaltaj tavjoor*** xij-deg ve?
（大工さんは棚を作りますか。）
b. * Mužaan xün *yuu-g-**aar*** xij-deg ve?

(125a, b)から INSTRUMENT 補語はなくてもよい付加語であるのに対し、THEME 補語はなくてはならない項であることがわかる。

(124b)の žagsax についても MANNER 補語を省いた(126)は、整列の様態の描写がないだけで、文としては申し分ない。

(126) Cerg-üüd žags-žee.
（兵士たちは整列しました。）

(127) a.[[yuu-g] + ***aar***<INSTRUMENT>] [***tasgaaltaj tavjoor***<THEME>]
×
AGREEMENT
[_____<THEME> + xij-]
b. [[xori xorin egnee-g] + ***eer***<MANNER>] [NA + žags-]
×

(127a, b)に示すように、INSTRUMENT/MANNER 補語は動詞との間に意味役割の一致を成立させないのであるから、付加語と見なされる。任意の INSTRUMENT /MANNER 補語を取り得る動詞には、次のようのものがある。

(128) gex “to say”, dajlax “to treat to”, tölöx “to pay”, yavax “to go”, yarix “to speak”, etc.

5.3. LOCATION 補語 (LOCATION Complements)

橋本(2002: 119-122)で論じられているように、具格には LOCATION の意味が存在する。

(129) a. Ta　*ajmg-uud-**aar***　**<u>tojr</u>**-no　uu?
2SG:N province-PL-INS go round-PRS　Q
（あなたは県を巡りますか。）<HA: 84>

b. Nadtaj　cug　gar-san　nöxöd,　cöm l　*oj*　*tajg-**aar***　**<u>tar</u>**-laa.
1PL:CMT together go out-PF friend-PL:N all　just　forest taiga-INS disperse-RPST
（私たちと一緒に出かけた友人たちは、タイガの森林に四散しました。）
<橋本 2002: 120>

c. A: Sonin　sajxan yuu　baj-na?
interesting good　something:N be-PRS
（何か変わったことがありますか。）
B: Yum-güj,　***čamaar***　yuu　**<u>baj</u>**-na?
something-NEG 2SG:INS　something:N exist-PRS
（何もありません。君の方には何かありますか。）<G-B 2004: 59>

(129a, b)は[+extensional] LOCATION である一定の広がりを持つ空間と経路を表す。具格の LOCATION は専らこのような意味で用いられるようである。(129c)は少し比喩的な用法で、一時的な所有の場を表示する。各文から補語を削除すると、不適格か不完全な文となる。

(130) a. *Ta tojr-no uu?
b. ? Nadtaj cug gar-san nöxöd, cöm l tar-laa
c. ?B: Yuu baj-na?

(130a)は不適格である。他方、(130b, c)には不完全さはあるものの適切な文脈中に位置づけられれば、解釈は可能である。いわば、LOCATION を具格から付与された補語は、(129a)では項の、(129b, c)では付加語的項の役割を担うと考えられる。

(131) a. [[ajmg-uud] + ***aar***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + tojr-]
AGREEMENT
b. [[oj tajg] + ***aar***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + tar-]
AGREEMENT
c. [***čamaar***<LOCATION>]　[_____<LOCATION> + baj-]
AGREEMENT

このタイプの動詞には、(132)に挙げたものが入る。

(132) garax “to go up”, orox “to enter”, yavax “to go”, etc.

5.4. STATUS 補語 (STATUS Complements)

具格の付与する STATUS の意味役割は、動詞との間に一致を生じさせないか、一致があったとしても弱く、それ故、付加語か付加語的項としての位置づけを受ける。

(133) a. Minij xüü "Govi-ijn xögžil" negdel-d *mal-ijn* *emč-**eer***
1SG:G son:N govi-G development cooperative-D/L cattle-G doctor-INS
<u>ažill</u>-a-ž baj-g-aa yum.
work-ICC be-EP-IMPF ASR
（私の息子は『ゴビ開発』協同組合で獣医として働いています。）<橋本 2002: 116>
b. Mongol-ijn ard tümen *P. Očirbat-**ijg*** *yörönxijlögč-**öör*** **<u>song</u>**-o-v.
Mongolia-G people:N P. Očirbat-ACC president-INS elect-EP-PST
（モンゴル国民は P.オチルバトを大統領に選びました。）<K&Ts.: 95>

(133a)の具格形補語は職業を、(!33b)具格形補語は役職を示している。(133a)からこの補語を取り除いた(134)は適格文である。

(134) Minij xüü "Govi-ijn xögžil" negdel-d ažill-a-ž baj-g-aa yum.
（私の息子は『ゴビ開発』協同組合で働いています。）

(133b)の songox"to elect"は具格形補語の他に THEME を表す対格形補語を取る。どちらか一方の補語を削除すると、適格性に相違が顕れる。

(135) a. ?Mongol-ijn ard tümen *P. Očirbat-**ijg*** song-o-v.
b. * Mongol-ijn ard tümen *yörönxijlögč-**öör*** song-o-v.

(135a)のように具格形補語を省いた文は、不完全ながら十分解釈可能である。一方、(135b)のように、対格形補語のない形は、不適格と判定される。songox は確かに二つの補語を指定するが、一致の強さに違いがある。THEME との一致は強く、STATUS との一致は弱いのであるから、前者は項なのに対し、後者は付加語的項と捉えられる。

(136) a. [[mal-ijn emč] + ***eer***<STATUS>] [<u>NA</u> + ažill-]

b. [[P. Očirbat] + ***ijg***<THEME>] [[yörönxijlögč] + ***öör***<STATUS>]
AGREEMENT
[_____<THEME> _____<STATUS> + song-]

他に tomilox “to appoint”などがこのタイプに属すると思われるが、残念ながら、手元にデータがない。

5.5. TIME 補語 (TIME Complements)

(137) a. Xavr-ijn šalgalt *5 dugaar sar-ijn* *xori-d-**oor*** **exel**-ne.
spring-G exam:N the fifth month-G twenty-D/L-INS begin-PRS
（春の試験は 5 月 20 日から始まります。）<橋本 2002: 121>

b. Bi *negdügeer ulirl-**aar*** sajn düü-tej **sur**-san.
1SG:N the first semester-INS good result-CMT study-PF
（私は一学期に勉強してよい成績を修めました。）<橋本 2002: 120>

c. Bi *ene* *sar-ijn* *süülč-**eer*** **ir**-ne.
1SG:N this+ month-G end-INS come-PRS
（私は今月の終わり頃帰って来ます。）<K&Ts.: 94>

(137a)は指定された日付を含めある一定期間試験が継続されることを暗示する。(137b)は一学期の期間中、(137c)は特定の日ではなく前後数日の誤差が含意される。具格が TIME を名詞句に付与する際に、特定の時点ではなく幅のある期間の意味を帯びさせるのである。TIME 補語を指定する力を動詞は所有しておらず、意味役割の一致は起こらない。具格形の TIME 補語は、付加語ということになる。

(138) a. Xavr-ijn šalgalt exel-ne.
（春の試験が始まります。）

b. Bi sajn düü-tej sur-san.
（私は勉強してよい成績を修めました。）

c. Bi ir-ne.
（私は帰って来ます。）

(139) a. [[*5* dugaar sar-ijn xori-d] + ***oor***<TIME>]　　[NA + exel-]

b. [[negdügeer ulirl] + ***aar***<TIME>]　　[NA + sur-]

c. [[ene sar-ijn süülč] + ***eer***<TIME>]　　[NA + ir-]

6. 共同格の補語(Comitative Complements)

モンゴル語の共同格は、-taj、-tej、-toj の三つの接尾辞で表す[14]。主な意味役割は、次の通りである。

(140) a. Bi *Gelegmaa-**taj*** Yapon-d yav-san 【ACCOMPANIMENT】
1SG:N Gelegmaa-CMT Japan-D/L go-PF
（私はゲレグマーと一緒に日本に行きました。）<AD>
b. Xuulbar-ijg *ex-**tej*** ni tulg-a-v. 【REFERENCE】
copy-ACC original-CMT 3POS compare-EP-PST
（複写をその原典と照合しました。）<岡田 1989: 88>
c. Manaj cereg *dajsan-**taj**-g-aa* tulald-a-v. 【THEME/AGENT】
1PL:G army:N enemy-CMT-EP-REF fight-EP-PST
（我が軍は敵と戦いました。）<AD>
d. Bi dandaa *najz-**taj**-g-aa* zövlöld-ö-dög. 【THEME/EXPERIENCER】
1SG:N always friend-CMT-EP-REF consult-EP-HBT
（私はいつも友達と相談することにしています。）<K&Ts.: 127>
e. Bi xoyor *düü-**tej***. 【POSSESSION】
1SG:N two younger brother-CMT
（私には弟が二人います。）<岡田 1989: 87>

共同格形の名詞句は、(149a)では同伴もしくは随伴を、(140b)では比較の基準を、それぞれ、表す。(140c)は戦う相手として対象であると同時に戦いを行う行為主でもあるので、THEME と AGENT の二つの意味役割を持っている。同様に、(140 d)は、相談の相手として対象であるだけではなく、その相談を引き受ける経験主でもあるので、THEME と EXPERIENCER の二つの意味役割を担う。(140e)は所有を示す。

では、動詞や叙述的形容詞との関係はどのようになっているのだろうか。以下で考察していくことにしよう。

6.1. THEME/AGENT 補語 (THEME/AGENT Complements)

(141) a. Bi ***tüüntej*** **<u>yavalc</u>**-dag.
1SG:N 3SG:CMT communicate with –HBT
（私は彼女と連絡を取り合っています。）<AD>
b. Ta bas *gavjaat* *žüžigčin A. Dolgor-**toj*** **<u>xamtar</u>**-č duul-san
2SG:N also outstanding musician A. Dolgor-CMT work together-ICC sing-PF
baj-x aa?
be-NPS Q
（あなたも優れたミュージシャンの A.ドルゴルとジョイントして歌ってたのでしょう。）<ZM: 2003.9.16.>

c. Tanajxan　*manajxan-**taj***　**urald**-a-x　uu?
2SG:G:CLCT:N 1PL:G:CLCT-CMT compete with-EP-NPS Q
（あなたのチームは私のチームと競争しますか。）<K&Ts.: 104>

(141a-c)はすべて行為動詞と共同格形補語の共起する文である。主格形主語は行為をする主体として AGENT であるが、共同格形補語は行為の働きを被る THEME であると同時にその行為を自らも行う AGENT でもある。この補語が項であることは、それを削除した形が不適格である事実から判断できる。

(142) a. *Bi yavalc-dag.
b. *Ta bas xamtar-č duul-san baj-x aa?
c. *Tanajxan urald-a-x uu?

行為動詞の指定する補語に、たとえば、OPPONENT（対抗主）のような新たな意味役割を設定導入する方法もあるが、第 1 節で述べたように、意味役割という意見の分かれる概念はできるだけ必要最小限度に数を絞るよう心掛けるべきである。本稿では、一つの格は同時に二つの意味役割を付与できるという立場に立っており、また、OPPONENT は THEME/AGENT で充分記述できるのであるから、徒に意味役割を増やすのではなく、可能であれば、既存の意味役割を組み合わせる説明を試みたい。(13)の原則にあるように、形態格の付与する意味役割と述語を形成する動詞あるいは叙述的形容詞の指定する意味役割との間に「双方向的な」一致が成立しなければ補語を項として確定できないのだから、後者にも二つの意味役割の組み合わせ指定を認める必要がある。

(143) a. [***tüünte**j*<THEME/AGENT>]　[_____<THEME/AGENT> + yavalc-]
AGREEMENT
b. [[gavjaat žüžigčin A. Dolgor] + ***toj***<THEME/AGENT>]　[_____<THEME/AGENT> + xamtar-]
AGREEMENT
c. [[manajxan] + ***taj***<THEME/AGENT>]　[_____<THEME/AGENT> + urald-]
AGREEMENT

このタイプの動詞には、(143a)と同様に、語幹に相互形接尾辞-lc-の付加した形、たとえば、yarilcax “to talk to each other”、barilcax “to build together with”、xarilcax “to communicate with” が観察される。

6.2. THEME/EXPERIENCER 補語 (THEME/EXPERIENCER Complements)

二つの意味役割の組み合わせのもう一つの例は、THEME であると同時に EXPERIENCER である補語と動詞の一致である。この場合、補語となる名詞句に積極的な行為性は期待されない。

(144) a. Bi ***tüüntej*** gudamž-i-n-d xalti mölti **uulz**-san.
1SG:N 3SG:CMT street-EP-n-D/L briefly meet-PF
（私は彼と通りで短い時間、会いました。）<K&Ts.: 283>

b. Bid *yösön öngö tumen züjl bodis yuu-**taj***
1PL:N every kind of color ten thousand thing matter thing-CMT
sonirx-moor.
be interested in-DSR
（私たちはあらゆる色や数多の事物に関心をもちたい。）<MX5: 100>

c. Bat *xen-**tej** č* **nöxörl**-ö-ž čad-dag.
Bat:N anybody-CMT make friends with-EP-ICC can-HBT
（バトは誰とでも友達になれます。）<K&Ts.: 278>

(144a)は行為動詞、(144b)は認識を表す心理動詞、(144c)は状態変化動詞であるが、どれも共同格形の補語を取っている。この補語のない文は、皆、不適格である。

(145) a. *Bi gudamž-i-n-d xalti mölti uulz-san.
b. *Bid sonirx-moor.
c. *Bat nöxörl-ö-ž čad-dag.

(145a-c)から共同格形の THEME/EXPERIENCER 補語は項と捉えられ、(146a-c)で示す意味役割の一致が見られる。

(146) a. [***tüüntej***<THEME/EXPERIENCER>] [_____<THEME/EXPERIENCER> + uulz-]
AGREEMENT

b. [[yösön öngö tumen züjl bodis yuu] + ***taj***<THEME/EXPERIENCER>]
AGREEMENT
[_____<THEME/EXPERIENCER> + sonirx-]

c. [[xen] + ***tej***<THEME/EXPERIENCER> + [*č*]] [_____<THEME/EXPERIENCER> + nöxörl-]
AGREEMENT

同じふるまいをする動詞には、次のものが挙げられる。

(147) taaraldax “to meet, to coincide”, canal nijlex “to agree with”, bolzox “to fix a time”, anduurax “to mistake for”, tanilcax “to get to know”, etc.

6.3. REFERENCE 補語 (REFERENCE Complements)

動詞と叙述的形容詞の事例のある点で、第 4.4 節で採り上げた奪格の場合と似ている。

(148) a. Sajn　sanaat　nöxr-öö　mongol　xün　*sar*　*nar-**taj***
good thoughtful friend-REF Mongolian person:N moon sun-CMT
<u>züjrl</u>-e-x-d-ee　tun　č　durtaj.
liken to-EP-NPS-D/L-REF　very even fond of
（よい心根を持つ友のことを、モンゴル人は月や太陽になぞらえるのが、とてもすきです。）<MX5: 161>

b. Ter　gancaar-aa *arvan xün-**tej***　**<u>tenc</u>**-e-x　čadaltaj xün.
3SG:N alone-REF ten+　person-CMT equal to-EP-NPS able　person:ø
（彼は一人で十人に匹敵する有能な人です。）<MX5: 5>

c. Ter　***tüüntej***　yad　**<u>ižil</u>**　xuvcasl-a-žee.
3SG:N 3SG:CMT just similar to get dressed-PPST
（彼女は彼とちょうど同じような服装をしていました。）<K&Ts.: 97>

d. Mongol　xel　*yapon*　*xel-**tej***　**<u>töstej</u>**.
Mongolian language:N Japanese language-CMT similar to
（モンゴル語は日本語と似ています。）<K&Ts.: 98>

(148a, b)はどちらも状態動詞で、共同格形補語を基準にして、主格形主語との類似性を述べている。(148c, d)は叙述的形容詞の文で、やはり共同格形補語が基準となって主格形主語の類似性が描写されている。四つの文とも補語が削除されると、不適格と判定される。

(149) a. * Sajn sanaat nöxr-öö mongol xün züjrl-e-x-d-ee tun č durtaj.
b. * Ter gancaar-aa tenc-e-x čadaltaj xün.
c. *Ter yad ižil xuvcasl-a-žee.
d. *Mongol xel töstej.

動詞や叙述的形容詞と共同格形補語との間には、次のような意味役割の一致が成立する。

(150) a. [[sar nar] + ***taj***<REFERENCE>]　[_____<REFERENCE> + züjrl-]
AGREEMENT
b. [[arvan xün] + ***tej***<REFERENCE>]　[_____<REFERENCE> + tenc-]
AGREEMENT
c. [***tüüntej***<REFERENCE>]　[_____<REFERENCE> + ižil]
AGREEMENT
d. [[yapon xel] + ***tej***<REFERENCE>]　[_____<REFERENCE> + töstej]
AGREEMENT

共同格形の REFERENCE 補語が項として機能するものには、形容詞が多い。

(151) adilxan “ alike, similar to”, ojrolcoo “close by”, čacuu “equal to”, etc.

6.4. ACCOMPANIMENT 補語 (ACCOMPANIMENT Complements)

本来、共同格の本丸と言うべき ACCOMPANIMENT を担う補語は、動詞との一致はせず、専ら付加語として機能する。

(152) a. Minij düü *angi-ijn-x-aa* *neg xüüxd-**tej*** xoyuul gol **yav**-žee.
1SG:G younger brother:N class-G-x-REF one child-CMT two together river:ø go-PPST
（私の弟は自分のクラスの一人の子と二人で川に行きました。）<AD>

b. Či *eež-**tej**-g-ee* uts-aar **yari**-aaraj!
2SG:N mother-CMT-EP-REF phone-INS speak-OPT
（おまえは自分の母親と電話で話しなさいね。）<K&Ts.: 179>

補語を除いた文はすべて適格である。

(153) a. Minij düü gol yav-žee.
（私の弟は川へ行きました。）

b. Či uts-aar yari-aaraj!
（おまえは電話で話しなさいね。）

(154) a. [[angi-ijn-x-aa neg xüüxd] + ***tej***<ACCOMPANIMENT>] [NA + yav-]

b. [[eež] + ***tej***<ACCOMPANIMENT> + g-ee] [NA + yari-]

7. 結び

本稿は、形態格の付与する意味役割と動詞あるいは叙述的形容詞が指定する意味役割との間に双方向的な一致の成立する時に、補語は義務性の高い項としての機能を帯びることを、モンゴル語の主要な五つの格形を採り上げて論証してきた。そこから導き出せる結論及び意義は、六つある。

第一に、モンゴル語のように形態格の発達した言語では、自動詞と他動詞の区別をする必要はない。むしろ、特定の補語を構成する格と述語を形成する動詞との間の意味役割の一致の有無で、ゼロ項、一項、二項のように動詞を分類することの方がはるかに言語事実に適っていると考えられる。元々、自動詞と他動詞の区別は、英語のように形態格が乏しいため、統語的な制約と前置詞等の接置語(adpositions)の働きに重きを置かざるを得ない言語において妥当性を発揮する。豊富な格を糊代にして局所的に語と語を連結させて一つの文を組み上

げるタイプの言語では、補語は補語として、動詞は動詞として、それぞれの意味や特性を見極めた上で、両者の関係と相互作用を究明していかなければならないのである。先行研究、たとえば、Kittilä, Västi and Ylikoski(2011)や Kittilä and Zúñiga(2014)の説明にあるような動詞から補語への一方向的な意味役割付与の捉え方は、それゆえ、妥当性を欠くと言わざるを得ない。

第二に、義務的な補語であるのか、それとも任意の補語であるのかという、項か付加語かの二項対立的な区別も、言語事実に照らして見ると、適切ではない。(109a-c)や(131a-c)で考察したように、動詞が補語に意味役割を指定する場合でも、「なくてもよい」という形で、当の補語との間に弱い一致しか成立させないこともあるからである。本稿では触れなかったが、ひょっとして、「あってもよい」という項的付加語(argument-like adjuncts)が存在するかもしれない。もしそうであれば、補語と述語の関係は、項‐付加語的項‐項的付加語‐付加語の一致の度合いに応じた連続性の上に成り立っていると考えることが可能となる。

第三に、モンゴル語には動詞が二つの補語に意味役割を指定する、Malchukov, Haspelmath and Comrie(2010）で多方面から詳細に論じられている、二重目的語他動詞(ditransitive verbs)は、厳密な意味では、存在しない。(59)や(78a-c)及び(117a, b)で考察したように、動詞の指定し得る二つの補語を比較すると、動詞との意味役割の一致の度合いが相対的に、どちらか一方が弱く、もう一方が強い事実が判明した。モンゴル語の動詞は一つの補語に意味役割を指定するのが基本であり、二つ指定する動詞は、準二項動詞(qusai-diargument verbs)と呼ぶのがよいと思われる。

第四に、形態格が付与できる意味役割と動詞の指定する意味役割とでは、数の点で不一致を示す。動詞が確実に指定すると思われる意味役割は、THEME(THEME/AGENT と THEME/EXPERIENCER を含む)、GOAL、LOCATION、SOURCE、REFERENCE の五つ、弱い形で指定するものとして、PURPOSE、CAUSE/REASON、STATUS の三つが数えられる。形態格が付加する名詞句に与える意味役割は、その他に AGENT、INSTRUMENT/MANNER、ACCOMPANIMENT、TIME、POSSESSION があるが、どれも動詞の指定とは無縁である。個々の形態格をみても、意味役割の一致を十全に果たしているのは対格だけで、たとえば、共同格の五つの意味役割の内、一致を成立させるのは三つのみである。動詞は固有の核的意味に最も関連した意味役割を優先的に指定するのに較べて、形態格は文において付加する名詞句に多様な機能を与えるというところに、数の不一致の相違の理由があるのかもしれない。

第五に、モンゴル語では、意味役割の指定は、動詞だけではなく、いくつかの叙述的形容詞も行うことができる。奪格の REFERENCE とは一致の度合いに揺れがあるものの同じ意味役割を指定できると捉えてよいし、与位格の LOCATION と具格の THEME とは完全な一致を構成する。どの類の形容詞に指定の力があり、どの格形と相性がよいのかについては、さらなるデータを分析した上で、検証する必要がある。

最後に、本稿で採り上げた五つの格の間には、補語を項とする事例の数において、言い換えれば、意味役割の一致の頻度において、概略、次のような序列を想定することができる。

(155) 格における意味役割一致の可能性の階層 (Hierarchy of Possibility of Semantic Role Agreement in Case)：

Higher ←→ Lower

ACCUSATIVE > DATIVE/LOCATIVE > INSTRUMENTAL
ABLATIVE COMITATIVE

対格で意味役割の一致が多いのは、動詞の指定する意味役割が圧倒的に THEME であるからである。「作る」、「なぐる」、「置く」、「買う」など、動詞には行為を表示するものがたくさんあるが、その行為の及ぶ第一の実体は THEME である。対格の意味役割の大部分が THEME で占められていることを鑑みれば、当然、一致の可能性も高くなる。一方、可能性の階層の低い位置にある格では、中核的な意味役割と考えられるものが、意外に一致を構成しない。具格であれば、INSTRUMENT/MANNER、共同格であれば ACCOMPANIMENT、POSSESION がこれに当たる。反対に、周辺的な THEME が完璧な意味役割の一致を提示している。

以上六つの結論及び意義を見渡した後に、残された大きな問題がある。なぜ、異なる格が同じ意味役割を付与するのだろうか。同じに見える意味役割には、実は、何らかの相違が存在するのだろうか。THEME は対格、奪格、具格、共同格で共有されている。しかし、その意味合いは微妙に異なっている。それを本稿では PARTITIVE THEME のような修飾語を付けたり、THEME/AGENT や THEME/EXPERIENCER のように組み合わせで表示したのであるが、その方法の適用範囲や妥当性に関しては、さらなる分析を重ねていかなければならない。

従来の文法書や辞書は、格の意味は格の意味として、動詞の意味は動詞の意味として、個々別々に扱ってきたように見える。例外は、Vietze(1988)の辞書で、動詞の項目に、すべてではないが、共起できる格接尾辞が表記されている。おそらく、結合価理論(Valency Theory)の影響を受けていると思われる(なお、結合価理論の詳細については、Faulhaber(2011)を参照のこと)。この辞書は優れているが、使用例文が乏しい。叙述的形容詞を含めた述語の意味役割と格の意味役割との関係の観点から、実用例を豊富に提供した文法書と辞書の登場が待たれるところである。これを実現するためには、モンゴル語母語話者の言語研究者や非母語話者でこの言語に通暁しているかコーパスを活用できる言語研究者に大きな期待が寄せられるであろう。

謝辞

* 本研究を発表するのに際し、貴重なコメントをして下さった、二名の査読者に心からお礼を申し上げる。もちろん、内容、誤記等の責任は、すべて著者一人に帰すものである。

注

1 NA は Not Available の略語である。

2 本稿では、不適格と判定される文には “*” を、容認可能ではあるが不完全と考えられる文には “?” を、各々、文頭に付す。

3 対格接尾辞-g は長母音、二重母音あるいは n で終わる語に、-ijg はそれ以外の語に付加する。本稿は、後者の表記では、男性語と女性語の区別はしない。

4 本稿で扱うデータのオリジナルはすべてキリル文字表記であるが、読者の便宜を考慮して、ラテン文字に翻字した。キリル文字とラテン文字の対応は、次の通りである。

母音字：а: a, э: e, о: o, ө: ö, у: u, ү: ü, е: je, ё: jo, я: ja, ю: ju, и: i, ь: i, ы~ий: ij

子音字：б: b, в: v, г: g, д: d, ж: ž, з: z, к: k, л: l, м: m, н: n, п: p, р: r, с: s, т: t, ф: f, х: x, ц: c, ч: č, ш: š

5 グロスで用いる略語の対応は、次の通りである。

ABL: Ablative, ACC: Accusative, ASR: Assertive, ASS: Associative, CLCT: Collective, CMT: Comitative, CND: Conditional, CNF: Confirmative, CNT: Continuative, CST: Causative, COOP: Cooperative, DIM: Diminutive, D/L: Dative/Locative, DSR: Desirative, EP: Epenthetic, G: Genitive, HBT: Habitual, ICC: Imperfective Converbal, IMP: Imperative, IMPF: Imperfective, INS: Instrumental, N: Nominative, NEG: Negative, NPS: Nonpast, OPT: Optative, PCC: Perfective Converbal, PF: Perfective, PL: Plural, PPST: Perfective Past, PRS: Present, PST: Past, PSV: Passive, Q: Question Marker, REF: Reflexive-Possessive, RPST: Recent Past, TOP: Topic Marker, VLNT: Voluntative, 1SG: First Person Singular, 2SG: Second Person Singular, 3SG: Third Person Singular, 1PL: First Person Plural, 2POS: Second Person Possessive, 3POS: Third Person Possessive, ∅: Zero Case, ∅IMP: Zero Form Imperative, +: Attributive Marker

6 引用文献の略記号との対応は、次の通りである。

AD: Attested Data, CD: Hangin(1970), G-B: Gaunt and Bayarmandakh(2004), HA: Hangin(1997), K&Ts.: Kullmann and Tserenpil(1996), L: Luvsanžav(1976), MX5: Bjambasan((1979), ÖS: Ödrijn Sonin (Newspaper), T: 田中(2005), U: Šarav, et al.(1978), YA: Arai et al.(1990), ZM: Zuunij Medee (Newspaper)

7 連語である。(　　)内は、連語の内部構造をグロスしたものである。

8 モンゴル語の名詞語幹には「隠れた n (hidden *n*)」を有するものがある。これは、属格、与位格、奪格の接尾辞が付加する場合に、顕在化する。

9 意味役割の一致が弱い場合には、点線矢印表記とする。

10 査読者から、項、付加語的項、及び付加語になる条件について、次のような意見をいただいた。

「項とは、A: 動詞あるいは叙述的形容詞が要求し、B: その意味役割が動詞あるいは叙述的形容詞の意味役割と一致する場合にのみ成立する要素である。そうすると、項: [+A, +B]、付加語的項: [+A, -B]、付加語: [-A, -B]として分類できる。」

確かに、この分類を採用すれば、三つの補語のタイプの相違が明示的に表される。ただし、(45a, b)の図の GOAL に見るように、この意味役割は、動詞が要求し、かつ、補語との間に一致が成立している。見かけ上は、項と同じく[+A, +B]である。それゆえ、GOAL を担う補語が「付加語的」であるのは、あくまでも、もう一つの意味役割である THEME と比較しての相対的な一致の強さに起因すると考えるのが妥当であるように思われる。

11 属格接尾辞と再帰所有接尾辞の間には-x-が挿入される。

12 奪格接尾辞は、母音調和(vowel harmony)に従って、-aas~-ees~-oos~-öös の四つの交替形を持つ。-aas を代表形とし、右肩に[4]を付すことで、交替形の数を表す。

13 査読者より、「行為の出所という考え方は、いろいろな言語に見られる」とした上で、次のような日本語と英語の例を挙げていただいた。

日本語: 私は太郎に/<u>から</u>それをもらった。

英語: May I ask a favor <u>of</u> you?

May I ask you a favor?

上記の文の下線の格助詞及び前置詞と結び付いた「太郎」と "you" は、それぞれ何かを与える側で、その意味では SOURCE である。ご指摘に感謝したい。

14 *-töj は存在しない。E.g. *nöxör-töj -> nöxör-tej「友人と (with the friend)」

参考文献

Anderson, Stephen R. (1985) "Typological Distictions in Word Formation," In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, 3-56. Cambridge: Cambridge University Press.

Arai Shin-ichi, et al.(eds.) (1990) *Mongol-Yapon Yarjaanij Devter*. Ulaanbaatar: Ulsijn Xelvelijn Gazar.

Baatarsukh, Khatantuul (2009) *Mongolian Grammar: Textbook*. USA: Munkhbayar Batmunkh.

Bible: Nergúj Nom. (1988) [translated by Kitamura, Akihide]. Ulaanbaatar.

Bjambasan, P. (ed.) (1979) *Mongol Xel 5 Angi*. Ulaanbaatar: BNMAU Ardijn Bolovsrolijn Yaamnij Xevlel.

Chomsky, Noam. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Dowty, David. (1991) "Thematic Proto-roles and Argument Selections," *Language* 67(3), 547-619.

Faulhaber, Susen. (2011) *Verbs Valency Patterns: A Challenge for Semantics-Based Accounts*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," In Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 1-88, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Gaunt, John, and L. Bayarmandakh. (2004) *Modern Mongolian: A Course-Book*. London and New York: Routledge Curzon.

Goldberg, Adele. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Goldberg, Adele. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.

Gruber, Jeffrey. (1965) *Studies in Lexical Relations*. Cambridge, MA: MIT Press.

Hangin, John G. (1970) *A Concise English-Mongolian Dictionary*. Bloomington: Indiana University Publications.

Hangin, John G. (1997) *Intermediate Mongolian*. [reprinted] Richmond: Curzon Press Ltd.

橋本邦彦. (1987) 「対格形の目的語の意味論と機能論」, モンゴル研究　第 18 号, 94-113.

橋本邦彦. (1998) 「現代モンゴル語の心理述語」, 東アジア言語研究　第 2 号, 20-33.

橋本邦彦. (1999) 「直接目的語の指示性」, 室蘭工業大学紀要, 第 49 号, 159-173.

Hashimoto, Kunihiko. (2002) “Instrumental in Mongolian,” *MEMOIRS of the MURORAN INSTITUTE of TECHNOLOGY*, No. 52, 111-125.

Jackendoff, Ray. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.

Kittilä, Seppo, Katja Västi and Jussi Ylikoski. (2011) *Case, Animacy and Semantic Roles*. Amsterdam&Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Kittilä, Seppo and Fernando Zúñiga. (2014) “Recent Developments and Open Questions in the Field of Semantic Roles,” *Studies in Language* 38(3), 437-462.

Kullmann, Rita, and D. Tserenpil. (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jensco Ltd.

Lovsanžav, Čoj. (1976) *Mongol Xel Bičig*. Ulaanbaatar: BNMAU Sajd Narijn Zövlölijn Ulsijn Deed, Tusgaj Dund, Texnik Mergežilijn Bolovsrolijn Xoroonij Xevlel.

Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (eds.) (2010) *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Næss, Åshild. (2007) *Prototypical Transitivity*. Amsterdam &Philadelphia: John Benjamins.

岡田和行（編訳）(1989) 『モンゴル語教科書（外国人向け）』東京：東京外国語大学語学教育研究協議会.

塩谷茂樹. (2007) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 大阪：大阪外国語大学.

Street, John C. (1997) *Khalkha Structure*. [reprinted] Richmond: Curzon Press Ltd.

Šarav, C., et al. *Unšix Bičig*. Ulaanbaatar: Ardijn Bolovsrolijn Yaamnij Xevlel.

田中セツ子. (2005) 『現代モンゴル語口語辞典』 東京：大学書林.

VanValin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla. (1997) *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vietze, von Hans-Peter. (1988) *Wörterbuch Mongolish-Deutsch*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig.

執筆者紹介

氏名：橋本　邦彦

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：92hashimot@gmail.com